オリ主の主人公補正って？

トロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オリ主の主人公補正って？

【Ｎコード】
Ｎ７０４６Ｖ

【作者名】
トロ

【あらすじ】
ある日、一人の青年が死んだ。
そして、よくある二次創作のように、神様の手違いで殺された彼は、望む力と世界をやると言われた。
望んだ世界は『リリカルなのは』。
望んだ力は『主人公補正』。
使い古されたありきたりな転生。青年は新たな人生に思いを馳せて――そして、サクル・ゼンベルとなった青年が目覚めたとき、初めて目にしたのは『原作』というリリカルな世界ではなく、ぼろぼろ

のストレージデバイスが一つ。

現実は、力を得ただけの凡人などには優しくなどない。
絶望的な戦場。摩耗し続ける精神。熱砂と轟音、鉄の匂いにまみれた世界の中で、地獄は途切れることなく男の全てを蹂躙する。嫌だ嫌だと叫ぼうが、迫り来る現実は容赦なく有象無象を破壊して、有り余る力の濁流に流され消えるは弱者の性か。
意味なく潰える命を背中に、願い空しく蜃気楼、掴めぬ祈りは腹の底。リリカルマジカル？そんなもの、灼熱の現実には似合わない。
※この作品はＡｒｃａｄｉａ様に投稿しています※

第一話【未練】（前書き）

よくある神様転生物です。

ちょっと風変わりなだけなんで、まぁよくある転生物と同じ感じに読んでください。

第一話【未練】

記憶に残る日々は、何よりも貴重で、かけがえのないものだったのだと今は思う。少なくとも、あの頃はつまらなく退屈だった世界が恋しい。

だが、もしあの頃の自分が今の自分を見れば、羨ましいと羨望と嫉妬の眼差しで自分を見るだろう。今の自分からしたら、むしろあの頃の自分が羨ましくて憧れるというのに。

「……ッ」

少年、サクル・ゼンベルは、ふとした時そんなくだらないことを考える。あまりにも不毛すぎて、我に返る度、未だ自身で招いた結果に未練を覚えている自分を殴りたくなる。

だが、罰するのは今ではない。サクルは改めて今現在置かれた状況を整理した。

ここは、管理局の統治が行き届いていない管理外世界と呼ばれる場所だ。サクルを含んだならず者の傭兵達は、今回この新たな管理外世界にて、ロストロギアらしき巨大な魔力反応の調査―ようは安全確認のための地雷処理係みたいなものだ―をするために、ここに来ていた。

本来なら傭兵といったならず者ではなく、管理局お抱えのエリートである執務官が調査をするというのが一般的な話だ。だが、管理外世界、しかも未確認の魔法生物がいるとすれば話しは違う。使い捨てのきく魔導師『くずれ』である傭兵を使って、まずは安全かど

うか調べることから始まる。
サクル達傭兵は当然、自分達が所詮は使い捨てにすぎないのは充分理解している。危険ではあるが、管理局直々の依頼だ。命をチップに出すのが当たり前である彼らは、ハイエナのようにこの依頼に群がった。
だが、調査開始時五十はいた傭兵も、今はサクルただ一人を残すのみとなっていた。
酸素が多すぎて窒息するくらいの密林の中、サクルはたった一人で帰還ポイントまでの道程を歩く。空を飛べないサクルは、こうして着実に草木を掻き分けて歩くしか道はない。
まぁどのみち空を飛べば、ロストロギアの魔力で活性化した魔法生物の群れに襲われるのがオチなのだが。
しかし空が駄目だからといえ、陸が安全かといえばそうでもない。陸には陸で、草葉の影に隠れた犬のなりそこないの群れが餌を求めてさ迷っている。
調査開始時、まず殺られたのは経験の浅い空戦の魔導師だ。せましと生えた巨大な木を飛び越え、一気にロストロギアの反応地点に向かおうとして、百は越えるグロテスクな飛行物体の醜い口内に捕まり、カラスに群がられた生ゴミのように荒々しく咀嚼された。
ならば陸からと思えば、傭兵なんかの陳腐なバリアジャケットを容易く引き裂く牙を持つ犬もどきの奇襲に、次々に数を減らしていき、混乱し部隊から一人で逃げ出していった奴らも、今はもう生きてはいまい。
そんな地獄の釜の中のごとき死地で、サクルは生きていた。付近の動植物を活性化させるロストロギアは、あまり近寄ると自身も影響を受けると判断し、状態を記録するに留め、一人、歩く度に地雷を踏むような恐怖を、半生で培った—大体十年程度だが—精神力で堪えながら、襲いかかる死の隊列を、手にしたストレージデバイスから放つ、物理破壊設定の魔力弾で穿って進む。
絶え間なく迫る死を掻い潜りながら、サクルの思考はまたあの事

を考える。
どうして自分はこうなったのか。
どうして『リリカルなのはの世界で』俺は彼女達と関わることなくこんなことをしているのか。
今更どうでもいいことだが、やはり思わずにはいられないのは、現状に対する不平不満、またはサクル・ゼンベルになる前の自分がまだ残っているせいか。

「……ッ」

また考えてる。
まだ甘ったれてる。
未だに腐ってる。

歯軋りしながら、飛びかかってきた緑色の犬もどきに発砲。血へドを撒いてくたばる奴に一瞥すら加えず、サクルは今度こそ自身の帰還以外の考えを放棄した。

―

死んだら神様に会った。間違ったから望む世界と力をやると言われた。
だから俺は大好きなリリカルなのはの世界と、何よりも最高の力の確信がある『主人公補正』を神様に願った。
「俺が不死身の理由？　俺がこの世界の主人公だからだ」

「ねーよ……ったく、不死身のサクル様の不死身たる所以は結局わからないままかい」

わずかな明かりと、欠けた椅子とテーブルの並ぶ店内。思い思いにガヤガヤと賑わう場末のバー。その片隅で、コーヒーを傾けながらくだらない冗談を吐くサクルに、傭兵仲間のククリ・シュバーゼンは呆れたと溜め息を吐き出した。

ククリはサクルがこの世界に転生して暫くして知り合った傭兵だ。大柄で、身体中に痛々しい傷痕があるせいか、あまり近寄り難い風貌である。しかし根は気さくであり、一緒の仕事に行ったら必ず死ぬとまで言われ、気味悪がられているサクルに唯一話しかける奇特な男だ。

「……」

「たまに喋ったと思ったらまた黙りやがる。あー、悪かった悪かった、たまに喋るお前の貴重な冗談にいいツッコミが出来なくてすみませんでしたよー」

「……」

「……おい店員、適当にこいつに飯作ってやって」

居たたまれなさに、ククリが堪らずご機嫌取りにサクルへ飯を奢る。

暫くしてぼろぼろのテーブルに乗せられたサンドイッチを、サクルは「ありがとう」と一言言うと、無言で食べ始めた。

「まぁお前さんの根が悪い奴じゃないのはわかるさ。」

サンドイッチを食べながら、意味深なククリの言葉に懐疑の念を表情に浮かべる。
周囲との関係が乏しくなっていたサクルは知らないが、周りに彼は不気味な男とも囃し立てられていた。
どんな困難な依頼だろうが、依頼の正否に関わらず必ず生還するサクルは、一種化け物染みてると周囲は思っていた。
つい先日の依頼だってそうだ。目先の金に目を眩ませ、執務官クラスがチームを組むほどの危険な依頼で死に行く傭兵達の中、サクルだけは身体中に怪我を負いながらも帰還を果たした。
Ａランクと、傭兵の中では破格の実力者であるが、あの依頼の顛末はＡＡランク以上で構成された部隊でようやくロストロギア回収に成功したというレベルだ。それを、ロストロギアの回収に失敗したとはいえ、状態を確認し、帰還まで果たすことがどれだけ異常か、命を常に捨ててきた傭兵達だからこそわかる。
異常な程の生命力。サクル・ゼンベルが異端とされているのは、その実力ではなく、　並外れたそれにこそあった。
しかも普段は物静かとくれば不気味に拍車がかかるのも無理はあるまい。
まぁ、実際話してみれば、それらの不気味さがただの表面的なものでしかないことを、ククリは知っている。
第３７管理外世界。管理局から溢れた魔導師達、傭兵が闊歩するこの世界でサクルは産まれ育った。そこそこに高い魔力素養があるとわかってからは、幼い身なりながらも傭兵として戦いの場に身を置いてきたために、人間性が磨り減っただけだ。
ククリはそれがわかっていた。まだ十四という若い彼が、人より口下手なだけだと理解していた。
別段、幼少から傭兵を生業にするのは、ここでは珍しい話ではない。今だってバーを見渡せば、まだ幼い少年少女がいる。魔力さえあれば子どもだって戦えるのだ。ならば生きてくために戦うしかない。

ただ、どんなに高い魔力素養を持とうが、命をやり取りする傭兵稼業。幼少からサクルの年まで生きている人はほぼ皆無といっていい。

「全く、お前ももう少し愛想よくしろよな」

「やり方を忘れた」

「ハッ、言うじゃないか」

「あんたはベラベラ言いすぎだよ」

ククリに皮肉を呟き、コーヒーの入ったカップを持つ。半分もないコーヒーをサクルは一気に飲み干した。温めのコーヒーの苦味が舌と喉を舐める感覚。

「……じゃあまた」

「おう。また会おうぜ」

席を立ち上がり、ククリに別れを告げてサクルはバーを後にした。店を出れば、ぼろぼろの建物が立ち並び、傭兵や物ごいや娼婦等々が狭い道を行き交っている。サクルはその間を特に目的もなく歩きだした。

「今日で十五……いや、三十五歳か」

今にも泣き出しそうな灰色の空を見上げ、誰にともなく呟く。この世界に生を受けてから、ろくに誕生日を祝ってもらったことのないサクルは、毎年誕生日が来る度に言い様のない寂しさを覚えてい

た。
あの頃に戻りたい。何度も何度も考えては、そんな自分に呆れる日々。本当はこんなはずじゃなかったはずだ。あの日、神様に転生させてもらった時、こうなるなんて思いもしなかった。
サクルに前世の自分が入り込んだのは、初めてストレージデバイスを貰ったときだった。使い古されたデバイスを握り締め、訳もわからないまま戦場に放り出され、涙に鼻水に汗に糞尿に、あらゆる液体を流しながらあれから生きてきた。
戦って。
戦って。
戦って。
戦い続けて。こんなはずじゃなかったのにと、神様を恨みながら戦った。
自分は主人公のはずだ。なのに何故、リリカルなのはの世界にいない。本当なら、あの世界でなのは達主人公と共に、自分も主人公として様々な事件を解決したはずだったのに。
それが何だ。何だこれは。理不尽だ。不条理だ。手違いと言いながら、何故神様は自分の願いを半分しか受け入れなかった……！
だが、そんな怒りも戦場というリアルには役に立たない。いつしかその考えは、ただ片隅でちっぽけな未練として残るだけになってしまった。そしてそれも、この先も続く死ぬまでの戦いでさらに磨耗して、いつかは消えていくだろう。
何処までも広がる次元世界。終わらない戦い。他の傭兵は知らないが、サクルは疲れていた。いや、きっと誰もが疲れているにちがいない。次元世界の管理というお題目の元、きらびやかな彼らの下でサクル達は消耗される以外に道はない。
だがそんな現状を嘆いたところで何も意味はない。
だから結局戦うのだ。修繕を繰り返した、何処にでもある二束三文のストレージデバイスを引っ提げて、サクルは今日も明日もただ戦うしかないのだ。

終わりが追い付く、その日まで。

次回予告

色褪せた昔。むせるような今。ガラクタのように連なる記憶。サクルの未来は朧気で、蜉蝣の如くは燃える光に身を焼くのみか。
ここは次元世界が産み落とした第３７管理外世界の白けた一角。
サクルの望んだ主人公補正が呼び出すか。見えない自意識、宙ぶらりん。怪しい奴が悪魔の取り引き。

次回「依頼」

サクル、敢えて死地へと赴くか。

第二話【依頼】

第３７管理外世界。ここの人達は毎日、いや毎秒を生きるのに必死になっている。
それに比べて俺はといえば、ただただ誰にも共感されない己の境遇と、傭兵として戦い続けることへの不満を吐き出して、今日を惰性で生きるしかない、薄汚い野良犬だ。
だからあえてあんな依頼を受けたのは、逃げ出したいとすら思っているはずの戦いにのめり込み、前世から変わらない、ちっぽけな自分を忘れたかったからなのかもしれない。
そうやって闘争の是否という矛盾を抱えて生きるのはきっと、俺が一度死んだにも関わらずまだ生きている、存在が矛盾している人間だからなのだ。

いつも通りの時間。いつも通りの席。いつも通りの飲み物。願掛けのように、毎日同じことを繰り返すサクルが、いつも通りコーヒーを飲もうとしたとき、そいつは現れた。

「君がサクル・ゼンベルかい？」

「……」

コーヒーカップをテーブルに置き、いつも通りを邪魔した声の主を見上げるサクル。無言の威圧感が放たれているにも関わらず、ここでは見たことのない男は、まるで動じない。

不思議な男だ。服装はここにいても珍しくない、ならず者が着るようなヨレヨレの服なのだが、何故かここの誰にもない深い信念のようなそれを感じた。
この第３７管理外世界の様々な場所は見知らぬ他人を警戒する。どうやら観光目的でここに来たわけではないのだろうというのは、男の眼差しから見てとれた。

「座っても？」

「どうぞ」

男はテーブルを挟んでサクルの向かい側の椅子に腰を下ろした。周りは、見知らぬ長身野郎と、イカれた異端野郎の対峙が気になってか、普段の賑やかさは鳴りを潜め二人の動向を伺っている。
話しづらいな、と男は内心でぼやき、まるで気にした素振りを見せないサクルに苦笑した。

「まるで見せ物だな。もしくは針のむしろと言ってもいい」

「嫌なら出てけばいい」

「そうはいかない。何せ私は君に依頼をしにきたのだから」

「……」

「お願い出来るかな？」

「……」

「ハハッ、これは手厳しい」

大袈裟に肩をすくめ、男は微笑した。サクルは先程から飲めていないコーヒーに口をつけ、対面の男などただいるだけで眼中にすらない。

そうして二人の間に沈黙が生まれると、必然見るのに飽きてきた周りも普段の賑やかさを戻していった。

男はただ黙ってサクルがコーヒーを飲むのを待った。

再び、コーヒーカップがテーブルに置かれる。そのときにはもう中身は綺麗になくなっていた。

「……」

「まさかずっと見てるのにコーヒーを飲まれ続けるとはね」

「……」

「無視か。本当に噂通りなんだな君は……サクル・ゼンベル」

「……依頼、何だ？」

サクルのあまりに唐突な一言に、男は虚を突かれたのか一瞬驚き、すぐに笑みを浮かべ「聞いてくれるとは思わなかったよ」と言った。

「針のむしろで依頼交渉するわけにはいかないだろ」

サクルがそう言うと、男は笑いを押し殺すように喉を鳴らした。

「ククッ、君はあまり喋らないみたいだが、冗談は上手いらしい。いや、やっぱしこういうのは実際に会ってみないとわからないものだねぇ」

そう言って、男は立ち上がり極自然にテーブルに一枚の折り畳んだ紙を置いた。

「支払いは私持ちだ。じゃあ、邪魔したねサクル君。あぁそれと、自己紹介がまだだったな。私はバグズだ。また会おう」

男、バグズはそう言い残すと、振り返らずに店を後にした。

「……」

無言で男の背中を見送り、サクルは置かれた紙を広げた。
内容は街外れにあるホテルの番地と部屋番号だ。どうやらここで話をしようということらしい。

「……」

怪しい匂いはするが、まずは話を聞いてみるのがいいだろう。
サクルは紙をズボンのポケットに仕舞うと、まずはデバイスを取りに自分の部屋に向かうことにした。

「よぉ、見てたぜサクル」

席を立とうとしたサクルに、バーの端から一部始終を見ていたククリが話しかけてきた。

「ククリ……」

「仕事だろ？　次はどこに出荷されるんだ？」

「それを今から聞きに行くところ」

それじゃ、と話しは早々に立ち去ろうとしたサクルの肩を掴むククリ。「待てよ」とニヤニヤ嬉しそうな顔で「なら、こっちの依頼一緒にやらないか？」と言った。

「……」

答えはしないが、サクルの無言を肯定ととったククリは依頼の内容を話し出す。

要約すれば、傭兵を百人規模で雇い、とある施設に攻撃を仕掛けるらしいとのことだ。聞く限りでは、金額も高く、ターゲットの施設にいる魔導師もBランクが数人程度と小規模。

「美味い話だろ？」

得意気に言うククリに、今度は呆れて物が言えなくなる。

どう考えたところで怪しい内容でしかない。

「やめとけ、キナ臭いよそれ」

「かも知れないが。お前が前に行った場所と違って、こっちは場所の詳細もわかっている上に人数も倍だ。しかも金は前金でも破格といってもいいしな……だがキナ臭いのに変わりはない。だからサクル、俺としてはいざって時のためにお前に来てほしいわけよ」

なっ？　と両手を合わせてサクルに願うククリ。困ったものだ、と内心の気持ちを表情には出さずに、ククリは思った。

傭兵として考えるなら、先程のまだ詳細も知らない依頼を内容を聞いてはいないとはいえ、前向きに検討する旨をあの男には言った。

その手前、「悪いが知り合いに別の仕事頼まれたから無理」と言うのは、サクルの傭兵としての信頼に傷をつけるだろう。

「……依頼人の仕事がそっちの時期に重ならなかったら、構わない」

迷った末に、サクルは折角こちらを頼ってくれたククリに申し訳なさを感じながらそう答えた。

「まっ、仕方ないわな。仕事のほうは一週間後だ。前日までにまた答えを聞かせてくれよ」

「あぁ」

じゃあな、と踵を返して、ククリはバーにいた仲間の元へと戻り談笑を始めた。

「……」

その姿に僅かな羨ましさを感じる。サクルはククリに背を向けると、何とも言えない羨望を振り払うように店を後にした。

―

サクルの自室にはあまり物がない。ベッドとテーブルと椅子、そしてデバイス用のパーツが幾つかある程度だ。

貯金なんかはほとんどない。毎月の家賃と食費、デバイスのメンテに使う費用で、ほとんどは消えてなくなる。一時期はここを出る

ための資金を貯めようとも思いもしたが、偽造パスに偽りの戸籍、そして次元世界移動に使う機械使用の金、そんなのを貯めようものなら、一月も経たずに餓死か、デバイスの故障による戦死をするし、高収入の依頼を受けても、治療費で金がなくなる。

ここで生きていく以外に、サクルには選択の余地がない。今更そこに不平不満はあまりないが、前世の記憶が、サクルに不平不満をたまに漏らさせる。

いっそ前世の記憶がなかったならどれだけよかったか。

苦笑、転生までして前世の記憶がいらないと思うのは、世界広しといえど俺くらいかもしれないと、サクルは口の端を吊り上げる。

とはいえ自分以外に転生なぞする奇特な人間はいないだろうが。昔から使い込んだデバイスの簡単な点検を済ませたサクルは、くだらない考えを放り捨て、再び男に貰った紙を見た。

先程ククリにはキナ臭いからやめとけと言いながら、自分もこうして怪しい依頼を受けようとしている。

人のことは言えないな。だが、傭兵なんというのはそんなものだ。商品は自分の腕と命だけ。ミッドの人間と比べるのもおこがましい物を、湿気た値段で入荷され、何処とも知らない戦場に出荷されていく。

自分達は人間の前に商品だ。言葉と知恵と僅かな魔力を持っただけの、それも駄賃を貰えば進んで死ににいく厄介な類いの。

「……」

デバイスを片手に、管理局では規制されている質量兵器—小口径の拳銃—も用心のために持ち、部屋を出る。

「……」

前日から続く灰色の空は、まだ晴れそうにない。

今日こそ降るかもしれないな。そんなことを思いつつ、サクルは依頼主の待つ場所へと歩を進めるのだった。

―

時間は遡る。管理局では後日、第８２６ロストロギア異変と名付けられることになる、サクルのみが帰還した事件。

彼が命懸けで持ち帰ってきた資料を片手に持つのは、奇妙な男だ。子どものように無邪気な表情をしながら、誰よりも悪意に満ちたかのような笑みを浮かべている。

だが男は、大型モニターに映るロストロギアの映像にも、手に持った資料にもまるで興味を示してなどいない。

興味があるのはそう――

「サクル・ゼンベル……第３７管理外世界にて、六歳から傭兵として各地次元世界を転々とし、依頼の成否はともかく、必ず生存している……場合によっては、ニアＳランクですら命を落とすだろう場所からすら」

面白い、と男は喜悦を浮かべる。

第３７管理外世界では、最高とされる傭兵でも、精々はランクにすればＡＡランク。受ける戦場を見誤れば、ＡＡランク程度は呆気なく死ぬ。

だが、今回このロストロギア事変にて偶然知り得たサクルという少年を男が調べたところ、本来なら生き残る可能性がゼロの戦場を、彼は幼いころから死にかけながらも生きてきたらしい。

高位魔法生物との激戦。管理外世界間の人間による戦争の前線。

敵の本拠地に囚われた要人の救出。その他挙げればキリのない戦いは、一つでも生存すれば奇跡というレベルばかりだ。
それを、たかだかAランクに届くかどうかといった少年が、奇跡を起こし続けて生きる異常。ここまでくれば、それは奇跡でもなんでもなく、ただの必然でしかないだろう。
素晴らしい。実にもって面白い。あり得ぬ奇跡を引き起こす、どんな才能にも勝る異才が彼にはある。

「こういうのを必然というのかな？　偶然、君のデータ収集を行いにいった場所で、まさかこれ程面白そうな逸材に出会えるなんて」

男の背後にいた女性は、語らずに頭を下げる。ただただ、主の喜びこそが至上である彼女には、子どものように無邪気に笑う主を見るだけで幸福感が身体中を駆け巡る。
その主たる男は、サクルの持つ異常に惹かれていて、女性の美貌など見もしない。ただの凡人にしか見えない少年、彼が何故ここまで戦えたのかそれだけを考えていた。
何故、有象無象の凡人が生きている？
何故、戦えてこれた？

「興味深い……興味深いよサクル・ゼンベル……」

笑みを深くしながら、恋い焦がれるかのようにサクルね異端に興味を持つ男。
無限の欲望、またの名をジェイル・スカリエッティ。

――そして、腐りかけの野良犬の運命は、本人の知らない場所で静かに動き出す。

次回予告

人の運命を操る偶然がある。
人の運命を嘲笑う必然がある。
では、今この場の運命を操るのは果たして何か。
戦場という名の遊戯盤。運命の神が、サクルの今を審判する。

次回『戦場』

知らぬは本人、只一人。

第二・五話【ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ】

待ち合わせ場所は、人の入りが少ない街の郊外にあるアパートの一室だ。

壁の外装が剥がれ、手すりには錆が付着している水ぼらしい建物だが、ここではなんら珍しいものではない。サクルの住む部屋も大体似たようなものだ。

階段を登り、二階の一番奥の部屋。どの部屋も誰か住んでいる様子はないが、だからこそあまり人に話したくない内容を話しやすい。

「……」

廊下の隅のドアの前に立ち、ゆっくり五回、間を置いてさらに七回ノック。そうすると、カチリと小さな音とともにロックが外れた。

「……」

警戒心を強めながらドアを開く。錆びたドアは思いの他開き難く、開けるのに少し苦労した。

無理矢理開き錆びたドアが悲痛な叫びをあげる。サクルはそんなことをまるで気にせず、意外に小綺麗な室内に入った。

「こちらだ」

バグズのだろう声にひかれて、サクルが蛍光灯の明かりに照らされた細い廊下を抜ける。

リビングにはボロボロのソファーが、やや大きめの傷が入り年季のある木製の机を挟み二つ。奥側のほうに紅茶を飲むバグズが座っていた。

「座るといい。立ったままではあれだろ？」

「……」

促されるままに対面に座る。まるで先程の焼き増しだとサクルは感じた。

サクルの感慨などは他所に、バグズは彼の分の紅茶を注ぎ置いた。

「まずは駆けつけ一杯」

「酒じゃなくて？」

「酒を飲むには早いだろ？」

「見た目以上に歳かもよ」

言いながら、渡された紅茶を飲む。ほのかな酸味と優しい香り、コーヒーのような苦味はないが、安心できる味にささくれていた気分も落ち着いた。

「どうだい？」

「……」

「またか……まっ、いいさ。早速話を始めよう」

紅茶のお代わりを注ぎながら、バグズは「第１５無人世界を知ってるかい？」と問う。

「知らない。傭兵に学があるわけないだろ」

「ハハッ、そう自分を卑下するのはよくないよ。まぁ知らないならいいさ、あそこは今となっては何の旨味もない土地だからね」

何処か含むような言い方をしながら「じゃあ近日大規模な傭兵の召集があることは？」とバグズは続けた。

思い当たるのはククリが言っていたあの胡散臭い依頼だ。話を聞いて、あまりにも怪しすぎる内容に、やめとけとは釘を刺したが、あいつも結局は命をドブに捨てる傭兵なのだから、金がかかればどんなに危険でもやるはずだろう。

思考がぶれた。バグズを見れば、考えにふける自分の言葉をジッと待っている。「知ってる。怪しい依頼だろ？」率直に感じたままの意見を返すと、バグズはツボに嵌まったのかクスクスと微笑んだ。

「君は寡黙だが素直で物怖じもしないな」

「……」

「黙りかい。ともかく、知ってるなら話しは早い……君には、その依頼に便乗する形で施設にある研究内容の調査、あわよくば奪取を依頼したい」

「他の奴からは施設の破壊と聞いた」

「それは表向きさ。君が調べる内容は、拡散されると問題でね。君ならここで一番腕がたつと聞いた。他の傭兵に気付かれず、施設破

壊前に情報の奪取も可能だろうってね」

「買いかぶりだ」

「私もそう思う。君はここでは強いだろうが、管理局の局員と比べたら有象無象レベルだ」

辛辣な物言いだが、サクル自身もそう思うために小さく頷いた。自分など数々の死線を抜けてようやくAに届くか否かの才能の欠片もない凡人だ。バグズの言いたいことはよくわかる。

「だが、話してみて君なら行けるんじゃないかと思う私もいる。不思議な気分だなこれは……」

「買いかぶり」

「違いない」

灰色の空の見える世界で、バグズの笑い声ばかりが室内に響く。サクルもまたククリ以外では久しぶりに出来たくだらない会話に僅かに頬を弛めた。

互いが紅茶に口をつける。

「で、どうする？」

「やらせてもらう」

それはよかったと笑うバグズが、カップを置いて手を差し伸べた。

「それじゃ、よろしく頼むよサクル君」

「……」

手を握ることはしない。サクルは差し伸べられた手を一瞥するに留め、残った紅茶を一飲みした。

「奪取する情報は何？」

冷たい態度にも慣れたのか、バグズは手を引っ込めると一枚の紙を取りだしサクルに手渡した。

内容の殆んどに黒線が引かれていて内容の詳細はわからない。だが、線の引かれていない文章に『人造魔導師計画概要』とあり、おそらくこれに当たるのが調査内容なのだとは見てとれた。

「人造魔導師計画……」

何処かで聞いたことがある響きにサクルは目を細めた。多分、サクルとしてではなくその前、前世で知った情報――笑いたくなる。もしかしたら原作に関われるという期待からではなく、あんなに好きだった原作の記憶が、最早殆んど頭に存在していない事実に。

前世であそこまで渇望したことに、今は然程興味が引かれない。頭に残った未練が喜びの声をあげているが、それも些末事。

そんなことよりも、仮にこれが原作に関わる内容だとしたら、ククリが言っていた警備はBランク数人というのはおかしいかもしれない。

「それを見てから今更やめるってのは無しだよサクル君」

サクルの内心を読んだかのようなバグズの言葉。

当たり前だ、駄々をこねる時期はもう遥か昔に終わらせた。

「……正直に話してくれ。本当にBランク数人だけの施設なのか？」
「答えはイエス。そう言う以外ないだろう？」
凄みをきかせたサクルの睨みを軽く受け流し、バグズは笑みをより深くする。
――呼吸。
「わかった……詳細は」
「それはここにデータがある。詳細はそっちで」
渡されるデータ端末を、デバイスに繋げ読み込む。
「あぁ、じゃあ何かあったらまた」
ここにはもう用はない。サクルはソファーから立ち上がると、踵を返してアパートを後にする。
ギチギチと嫌な音を鳴らしながら開くドア。
「感づいた、か？　まっ、傭兵なんて仕事をするくらいだ。適当な戦場に飛ばされるのはよくあるだろう」
バグズは誰もいなくなった部屋で一人呟く。
にしても、話していて面白い男だったが、正直上直々に推薦されるほどの男だったかと思うと疑問が残る。
別段レアスキルがあるわけでもなく、魔力量も平均値を越える程度、管理局に入れば陸戦Aに何回か挑戦して、いつかは合格するく

らいか。
まるで特徴がない。ただの凡人。
「……まっ、二度と会わないだろうからいいけど」
どうせ生きて帰ることはないだろう。何せ、彼らが向かう先は、あの大魔導師が住まう魔女の巣窟。
名を、時の庭園。
「うん、紅茶が美味しいねぇ」
鼻歌混じりに新たな紅茶を注いで飲む。その頃にはもう、サクルの存在など頭の中から消え去っていた。

第三話【戦場】

放置された採掘用の機械。荒れ果て、乾いた大地と風化しかけの鉄筋のビル群が立ち並び、砂ぼこりが風に巻き上げられる錆びた世界。今はこの世界に人は住んでいない。

第１５無人世界。資源採掘の場とされてきたこの世界は、今は管理局の管理が行き届いていない世界だ。

管理局発足直後、現在では自然保護のため、生態系を破壊しつくす採掘は禁止されているが、当時は今に比べ管理局という組織も未熟だったため、こうして資源を吸い尽くしてしまった世界は多々ある。現在は、過去の戒めとして、ミッドなどの様々な管理世界にある教育機関では、歴史の授業にもされることがある。

そんな世界の一つであるここに、違法な研究施設が建てられており、そこで行われている研究の調査が、サクルが依頼された任務内容だった。

今は施設を取り囲むように、五人の部隊を二十に分け、ククリを含んだ百を超える傭兵達もいるが、彼らは研究施設の破壊のみを依頼されているだけで、サクルのみが研究の調査、奪取をバグズより依頼されていた。

「へへっ、お前がいると安心できるな」

ククリがサクルの肩を叩きながら、リラックスした表情でそう言う。

「あぁ」

サクルもそう返しながら、ストレージデバイスを構えなおす。

「しかし、座標は間違ってないよな……」

不意に、ククリは施設があるだろう座標にある物を見て懐疑な表情を浮かべた。

他の傭兵もそうなのか、目の前の施設、いや、庭園といっていい物を見て困惑の声をあげる。

建てられたというよりかは、着陸しているといったほうがいいかもしれない。荒廃した大地で唯一そこだけが、緑豊かな自然に囲まれている。

違和感、魔力反応もなく、依頼内容にあった魔導師の姿も確認できない。

キナ臭い。既に情報とは微妙に異なる内容にはなっているが、傭兵達は念話でタイミングを合わせ、同時に進行を開始する。

「……」

目指す先は楽園か、あるいは死地か。嫌な予感を感じつつも、サクル達は庭園に一歩足を踏み入れた。

――その様子を、サクルに依頼をしたバグズという男が、鳥型の使い魔の視界を通じて見ていた。

「まっ、まずは順調か……しかし、未だに私は不思議で仕方ありません。確実にFを回収するなら、執務官を使えばよかったのでは？」

『執務官を使うにはまだ早い。幾ら大魔導師と呼ばれた奴とて、完全にFを物にしたかはわからんからな。確証のないものに貴重な戦

力は使えん』

遥か後方から通信機片手に、謎の声と会話するバグズ。今はその服装は、管理外世界にいるような汚ならしい格好ではなく、管理局の魔導師が着る制服に身を包んでいる。

これが本来の彼の姿。正確には、管理局の職員でもなく、さらに上層部直轄の部下だが、今は割愛する。

「貴女方がそう言うのなら構いません。しかし、クライアントとして出資している無限の欲望から、自ずと成果が得られるはずなのに、わざわざ他から奪取する必要があるので？」

皮肉げに頬をつり上げてバグズは通信機ね向こうにいる、しわがれた老人の声に言う。

『奴はFではなく、今は別のプロジェクトを進めている。それに基本骨子は完成しているが、他の有象無象では成果は出せまいし、実際に出来ていない。だが、Fにすがるしかない大魔導師ならば、あるいは完成形が出来てるやもしれない……そして、もし出来ているならば、興味深い』

「先程は出来てないと言ったのが、随分と妙な言い回しですね」

『だからあえて使い捨てを使用するのだ。使い捨ての進行が成功するなら良し。失敗するなら、奴の目的に手を貸しFの詳細を知りえるも、使い捨てによってわかるだろう奴の戦力から、見合った戦力を送り込むもまた良し』

「ハァ、しかしデータ奪取を一人のみでよかったのですか？　情報によれば中々やるようですが、奪取できずに庭園だけが壊れる可能

性もあるのではないかと。確かにあの規模の傭兵全てに奪取を依頼したら、データを別の場所に転売する危険があるのもわかります。ですが、奪取依頼なら、もっと上のランクの傭兵に頼めば――」

『それについては問題ない。あの傭兵は是非にとの推薦があった。仮に調査、奪取が出来ずに破壊のみが成功したら、自らが研究をすることを推薦条件にな』

「……推薦者はやっぱし欲望の奴で？」

『――質問は以上だ。お前は自身の役割を果たせ』

暫くの沈黙の後、通信機からは冷めきった老人の声が返ってきた。おっかないなと思いつつ、バグズは進軍を始めた傭兵達を見る。様子見で使われる彼らに哀れみも同情も一切感じない。所詮は傭兵、使われる潰されても、また替えがきく消耗品。

「私も似たようなものではあるが……だが、あぁは言ったが多分彼らじゃ死ぬだけだろうな。まぁ精々足掻くがいい、傭兵諸君」

クツクツと笑うバグズの視線が見据える向こう。美しき庭園にて、戦火の炎が次々に噴き出していた。

―

美しい庭園だ。手入れが行き届き、小鳥達の囀ずりや、木々の息吹きすらも聞こえそうである。傭兵達の荒んだ心を癒し、このまま

ここで日々を過ごしたいとすら思えるくらいだ。
だが、ほとんどの傭兵はこの庭園の奥にあるだろう施設を壊し、高額な依頼料を手に入れることを考え目をぎらつかせている。
まるでハイエナの群れだ。汚ならしく死肉を貪る獣の軍団。男達は金のためにデバイス片手に包囲網を狭めていく。

――異変が起きたのは、庭園に入ってから少ししてからだった。

「……これは」

草木のざわつきに紛れて響く地鳴りのような音。サクルは耳と体を揺らす音に警戒を強める。
ククリとその他傭兵も同様に警戒心を強めながら、辺りを見渡した。
地鳴りは様々な方角から聞こえてくる。
そして、警戒しながら抜けた林の先。開けた広場が――戦場と化していた。

「こ、こいつら攻撃がビクともしねぇ！？」

「ヤメ、近づァァァァァァァッッ！」

「んだよこりゃあ」

呆然と口を開くククリ。あまりにも一方的な戦いが、そこでは繰り広げられていた。
――六種類はあるだろうか、大小様々な傀儡兵総勢三十が、傭兵達を迎え撃つ。傭兵達の魔法を巨大な傀儡兵がが受け、その他の兵が魔法で次々に傭兵を蹴散らす様は、敗残兵が狩られる姿みたいに思える。

彼等は知らないが、この傀儡兵はそれぞれがAランク魔導師に匹敵する力を持つ。平均Cもあるかわからない傭兵では、蜘蛛の子を散らすようにやられる以外に道はない。
その傀儡兵の壁の向こうに施設らしきものがあるが、今の彼等には目と鼻の先にあるそれが、何よりも遠かった。

「ヤベェぞサクル！　結界が張られてやがる！」

その惨状を見て、敗北を確信したククリが、いち早く離脱を試みる。しかし、侵入したら最後、AAランクの魔法でもなければ抜け出せない結界に、彼等はいつのまにか捕らわれていた。
――逃げ出せない。圧倒的に重い事実。

「クソッ！　クソッ！　依頼内容とまるで違うじゃねーか！」

「畜生、嫌だ！　死にたくない！」

魔法が炸裂し響く爆音に隠れて、弱気な発言が方々から聞こえてくる。
弱気になるなというほうが、無理だというものだろう。絶望的な戦力差、勝ち目のない戦い。
故にサクルは思考を止めて、前に進むことを選んだ。

「ククリ。施設を潰す、手伝え」

「ハァ！？　何言ってるんだサクル！」

あまりにも馬鹿げた言い分に、ククリは目を見開く叫んだ。
だがサクルの目がその発言が冗談ではないことを物語っている。
ククリは強い意思を宿したサクルの目を見て「……勝算は？」と、

観念したのか、肩を竦めた。

「残存戦力を集めて一点突破。施設に入り込んでゴーレムを操る奴を叩く……成功の確率は五分もないが、このまま殲滅戦をやってたらその機会もなくなる」

いつになく饒舌なサクルの言葉に目を丸くしながら、穴はかなりあるが、無駄に考えて殲滅されるよりかはまだマシなサクルの案に頷く他、ククリにはなかった。

「考える時間はないか……『お前ら！　固まってぶち込むぞ！　今なら数はまだこっちに分がある！』」

ククリの念話に、賛否様々な意見が行き交う。結局賛同したのは十人程度だが――最早、これ以上待つ余裕はない。

砲火の雨、近接にて倒される傭兵。一体倒したと思えば、周りには十を越える傭兵の躯。

慌てて集まってきた傭兵達にも、目掛けて魔法の掃射が強まる。

「クッソがぁ！」

「ッ！」

障壁を張りながら、集結しようとする傭兵を援護のため、必死に応戦するククリとサクル。だが、結局集まったのはサクル達最初の五人と、念話に同意して辿り着いた四人。残りは合流前に魔法によって吹き飛ばされた。

「サクル！」

「……やるぞ。障壁に魔力を注げ。援護は勝手にくるはずだ」

サクルとククリを先頭に、決死の部隊が進軍を開始する。障壁に魔力を回し、傭兵達の無謀に尽きる前進は、端から見れば命を投げ捨てる無知の前進だ。

身体強化。魔法障壁。この二つに魔力を注ぎ、爆発する大地の上を後ろは向かずに走り出す。

致死の魔法を避けながら、または弾きながら、徐々に近づくおぞましき傀儡兵を睨み付け、やはりサクルは「戻りたい」と、女々しい思いを掘り起こした。

「ッ……！」

またこれだ。いい加減忘れろ。自分で選択したこの結果を、いつまでもウダウダ考えるな。

考えを振り切る。同時、無言で迫る五体の傀儡兵に、サクルは無言で魔力弾を乱射。緑色の魔力弾は、避けられ、受けられ、決定打にならないが――

「ハァッ！」

肉薄する。気合いを入れながら、一際巨大な奴に接触。こちらを掴まえようとする手を掻い潜り、股下をスライディングして抜け出した。

立ち止まることは許されない。傀儡兵の壁を抜けたサクルへ、魔法弾が降り注ぐ。絨毯爆撃の壮絶が、サクルの体を大きく揺るがす。

「今だ！」

その背中に続かんと、サクルを狙うことで緩んだ爆撃を掻い潜り、

ククリ達傭兵が何人か壁を抜けて施設へ駆け込まんと走る、走る、走る。

だがそう簡単に侵入を許す傀儡兵ではない。愚かな侵入者元へ、次々迫る魔法の雨。陳腐な障壁、バリアジャケット突き破り、男達が鮮血飛ばして大地へ沈む。

サクルは走った。魔法弾で抉れた土と、隣にいた見知らぬ男の血で体を汚しながら、サクルは表情一つ変えられずに走った。

泣きたいし、叫びたいし、逃げたいし、認めたくない。だが感情を表すには、サクルはあまりに人間性を磨り減らしてしまった。

しかし、戦場に必要なのはそれだった。醜くわめき散らす人間らしいあり方ではなく、感情の発露を忘れた機械こそ、戦場には必要な素質なのだ。

例え本人が望まなくても、サクルは戦場に必要なスキルを得ている。それがつまり通常の社会生活をするにあたり、社会不適合者とでも言われるような欠陥だとしても。

「ハァ、ハァ……ハァ……！」

呼吸荒く、傀儡兵を抜けてからは施設を背中にし、応戦しながらバックで施設を目指す。頭を、腕を、足を、腹を掠める魔法弾に血を流しながら――

「ッ！」

施設への門らしき物を撃ち抜き飛び込む。その背中を追って傀儡兵も走ってくるが、サクルは立ち止まらずに施設内部への侵入を開始した。

――その先は果たして天国か地獄か。闇に包まれた向こう側へ、乱れた呼吸を整える余裕すらここにはない。

次回予告

広がり続ける鉛色の空。
踏み締めるは赤錆の染みた大地。
熱血と轟音をくすんだ肌色に降りかけながら、それでも抜けた地獄の先も、やはり続くは絶望、絶望、また絶望。
ここは黄泉路。暗黒の静寂に浸りながら、女が一人失った我が子を求め足掻いている。

次回『プロジェクトF』

戦火の只中で少女は目覚める。

第四話【プロジェクトF】

――遂に、遂に完成した。

女は歓喜に満ちていた。自身の不注意の結果死んでしまった愛しい我が子。その我が子を復活させるために手を出した禁断の技術『プロジェクトF．A．T．E』。藁にもすがる思いで完成させたその技術にて、彼女は死んだ娘の完璧なクローンを造り出した。

研究を完成させて、造り上げた我が子に瓜二つの少女が、今目の前の緑色の液体に満たされた培養槽に収まっている。

隣には、同様に培養槽に浸ったもう動かない愛しい我が子。

完璧だ。後は自分の愛した娘の記憶を転写すれば、愛しい我が子、アリシアは甦る。作業は最終段階だ。女は早速、最後の作業に取りかかろうとして。

瞬間、施設を揺るがす轟音。

「侵入者……！？」

突然の襲撃に、女は歯噛みした。この大事な場面で、折角のチャンスだというに……！

だが、それもいい。いいだろう。女は、オリジナルのアリシアの眠る培養槽を動かし、庭園の奥深くに転送させる。

これでいい。新たな器は、他に置ける場所がない以上、このまま置くしかない。

ここに置いたら万が一もあるだろうが、まぁ『破壊されたらまた

造ればいい』だけの話ではあるし。一応傀儡兵を二体置けば問題ない。

「いいわ。私とアリシアの門出を盛大に祝いなさい。野良犬共」

狂気に支配された女が笑う。身を焦がし続ける灼熱を吐き出さんと嘲笑する。

戦火と硝煙。爆音と咆哮。響き渡る死の匂いと音を子守唄を聞く少女はまだ、自分を産んだ親に祝福されないという真実を何も知らずに、ただ一人眠り続けるのだった。

―

侵入に成功したサクルに、他の傭兵を待つ余裕はまるでなかった。

「こ……のッ！」

施設内にもやはりいた傀儡兵、その追跡からサクルは必死に逃れていた。ジグザグに動きながら、自分を狙う魔力弾を回避する。

相手は三体の小型傀儡兵だが、広場に比べ数が少ないとはいえ正面からの応戦は無意味だ。あの傀儡兵一体一体全てが、サクルの全力をもってようやく戦えるかどうかというレベル。先程は他の傭兵が戦っていた隙を縫うことで施設内への侵入に成功したが、援護のない現状では正面突破は不可能だろう。

だが施設内に傀儡兵がいる可能性にあのとき思い至らなかったわけではない。サクルは背後から追ってくる傀儡兵から逃げ、通路の角を曲がる。瞬間、デバイスを待機状態に戻してバリアジャケット

も解除し、さらにリンカーコアの活動を可能な限り抑えた。
みずぼらしい服装に戻ったサクルは、腰に差した筒を抜き取り足元に落とす。すると、落ちた筒から煙が溢れだし通路を埋め尽くした。発煙筒で視界を消し、魔法行使を抑え、魔力反応からも感知を逃れる。温度探査があったらおしまいだが、そのときは諦めるしかない。サクルは発煙筒を落とした直後に傀儡兵とは反対側に走りながら、発煙筒をさらに数個通路の奥に投げる。
これで僅かだが視界からの反応はなくなるはずだ。後は天運、サクルは内心でどうか見つからないようにと祈りながら、煙のただ中で壁に背中を預け息を殺す。
耳に地鳴りをあげる傀儡兵達の足音が響いてきた。だが魔力弾を放つ音は聞こえない、どうやら上手く奴等の探知を誤魔化すことができたらしい。サクルは無表情で煙の向こうにいるだろう傀儡兵に視線を向けた。徐々に近付く足音、図体が仇になったなと、サクルは内心皮肉を漏らす。
そして、足音が目の前を通り過ぎたと同時、サクルはバリアジャケットとデバイスを展開して、傀儡兵がいるだろう場所目掛けて出鱈目に魔力弾を乱射した。
戦場という場で考案した、魔力残量を一切考慮しない、量を重視した面制圧用魔法。煙を吹き飛ばしながら走る緑色の魔力光の群れが、突然の奇襲に反応すら出来ない傀儡兵の背中に着弾し、傀儡兵達を通路の床に沈める。
その勢いのまま、雨霰と魔力の弾丸をサクルは撃ち続ける。結果、ダメージは少ないが、あまりの物量に傀儡兵達は起き上がることが出来ない。
「オォッ！」
千載一遇のチャンス。だがサクルの形相は必死そのものだ。もしこの斉射で傀儡兵を落とせなければアウト、援軍の傀儡兵が来ても

アウト。時間と魔力残量との勝負。
しかし、傀儡兵もやられるばかりではない。体を凹ませながら、徐々にだが起き上がろうとする傀儡兵。
威力が足りない。しかし、威力を上げれば面制圧射撃を維持できない。だがこのままでは傀儡兵の反撃に晒される。でも手がない。
焦りがサクルを急かせる。その乱れが弾幕を微かに薄くさせ、傀儡兵の一体に起き上がる隙を与えてしまった。

「……ッ！？」

魔力弾に撃たれながら、傀儡兵も射撃体勢に入る。
迎撃、新たな魔法を編む余裕も器用さもない。
回避、イコール攻撃の中断。未だ余力を残す三体を相手に、一足の間合いで逃れる可能性はない。
撤退、まずは目の前をどうにかしないと不可能。
頭の中で次々に考えが浮かんでは却下されていく。そうしている間にも起き上がった傀儡兵の銃口はサクル目掛けて――
瞬間、傀儡兵の頭が勢いよく弾け飛んだ。

「オラァ！」

威勢のいい叫びと共に、充分な威力を伴った魔法が倒れている傀儡兵に直撃し、その体に風穴を開ける。
爆発、ショートした部分が動力炉に引火し、傀儡兵が小規模の爆発を起こした。
爆風で煙が吹き飛ばされる。たまらず顔を庇ったサクルのその隣には、見知った顔がにやけた笑みを貼り付けてサクルを見ていた。
「よぉサクル。ったくこの童貞野郎が、我慢出来ずに先に中いっちまうなんざ早漏ここに極まり、だな」

「ククリ……」

サクルは、自分と同じようにバリアジャケットのいたる部分を鮮血に濡らしているククリを見返しその名を呼んだ。

そうすれば「おう」と力強く響く声。サクルは安堵から溜め息を一つした。ククリもサクルに近い実力者なので無事を信じてはいたが、こうして生きて会えたことが嬉しくてたまらない。見たところ、傷は浅いので戦闘に支障はないはずだろう。サクルは気を引き締めて通路の先を見据えた。

「どうする？　適当に壊すか？」と、ククリがデバイスで自分の肩を叩きながら言う。

「……他に侵入出来たのは？」

「確認したかぎりじゃ五人、てとこか？　まぁ俺も自分のことで手一杯だったからよ。正確にはわからないが」

「なら、入った奴等が遠慮なく壊してるだろ」

直後、爆発音と地鳴り。ほら、とサクルはククリを見た。

「だったら俺らはどうすんだ」

ククリの疑問は当然だ。彼はこの施設の破壊依頼がそもそもの目的であり、他のことはまるで知らない。それは他の傭兵も同じだが、唯一サクルだけは違った。

「もしかしたらジョーカーになる物があるかもしれない。それを盾

にここから離脱する」

そう、調査内容とされていた『人造魔導士計画』。これを奪取し、自分達を殺せば情報が拡散すると脅せば或いは何とかなるかもしれない。

正直、交渉が成功するという可能性は希望的観測にすぎないし、まだいるだろう敵を掻い潜り情報を入手出来るとも限らない。

あれほどの傀儡兵を複数保有する程だ。例え自身の戦闘力が低くても、傀儡兵を近くに侍らせているだろう。または、あまり考えたくないが傀儡兵を遥かに上回る力を持っているかもしれない。いずれにせよ情報を何とかして奪い交渉する以外に、自分達が助かる道はないだろう。

あの結界に取り込まれた時点で、状況は詰んでいたのかもしれない。

「やるぞ、ククリ」

「任せろよ、サクル」

だが、まだ動けるなら戦うだけだ。

二人が同時に前を向く。瞬間、待っていたかのように一体の中型傀儡兵が現れた。

「右……！」

「ならお前は左だ！」

左右に分かれて、中型傀儡兵に集束した魔力弾を放つ。緑と赤の軌跡は傀儡兵の装甲に防がれながらも衝撃で後退させた。

だが微塵も怯む様子もなく、傀儡兵も魔力弾を放ち応戦する。バ

リアジャケットでは防げない一撃一撃を、二人はラウンドシールドで弾き距離を詰めた。危険な行動だが、いつ敵の援軍が来るかわからない今、多少の無理は仕方ない。

「ククリ、防御」

「了解ぃ！」

サクルはいつまでも防御に回るのは得策ではないと判断し、ククリの背後に回り魔力の集束を始める。勝負は一合だ、狙うしかない。

チャージを始めたサクルの前で、当然ながら弾幕を一心に受けることになったククリは、ラウンドシールドを維持しながらも苦悶の表情だ。一撃ごとに揺れる体を止め、サクルの盾として立ち塞がる。

「まだか！？」

だが所詮は傭兵の展開するシールド。十秒が経つ頃にはもうククリに限界が来ていた。

その限界を見透かしていたかのように、サクルがデバイスの先に緑の輝きを携えてククリの背中から飛び出した。

「……！」

無言の咆哮。解き放たれた弾丸の威力は、先程の数倍以上。弾幕の間を抜けて駆け抜ける緑の切っ先は、寸分違わず傀儡兵の胸を穿った。

その間際を狙いサクルは光を追うように走る。そして傀儡兵の真横に並ぶと、さらに零距離で魔力弾を撃った。炸裂した緑の光が傀儡兵を宙に吹き飛ばす。

飛翔先には、魔力を吹き出すデバイスを両手で担いだククリが待

ち構えている。ピンポイントだ、鼻を鳴らしてククリが両腕の筋肉に力をみなぎらせた。

「オォォ！」

気合一撃。バットのように振りかぶったデバイスから溢れる魔力を、傀儡兵の体に直接叩きつける。さながら野球のボールの如く魔力に打たれた傀儡兵が耐えきれずに千切れ飛んだ。

「ハッ！　俺らが組めばこんなもんよ！」

勝利の雄叫びをあげて、ククリは拳を突き上げた。四散する傀儡兵の爆発が爽快だったのか、心持ち声の調子もいい。

とはいえいつまでも勝利の余韻に浸る暇などはない。サクルとククリは再び警戒体勢に入ると、駆け足気味に通路を歩き始める。

もし外と中の傭兵が全滅すれば、瞬く間にこちらに全ての傀儡兵が来て完全なチェックをかけられる。時間の猶予など僅かにだってないのだ。事実、二人はほぼ百パーセントの敗北が確定していることを理解していた。今行おうとしていることも、楽観に楽観を重ねた勝算だともわかっている。

でもサクルは、ククリは、互いがいるという強い安堵があった。サクルが幼かった頃からの付き合いの二人だからこそ、その信頼感がこの不可能を打倒する力になるのだと信じてる。

二人は通路を歩きながら、おもむろに拳を付き合わせた。互いの拳が当たり、骨がぶつかり合う鈍い音。

言葉は必要ない。背中を預ける信頼こそが、言葉に勝る強い強い絆なのだから。―

時の庭園に秘された禁忌を巡る戦いは佳境に入っていた。次々に血潮をほとばしらせ、無様に朽ちていく傭兵の命。男達が織り成す人形との舞踏会は、既にその人数比を逆転させ、一人、また一人と演舞に躍り出た者の全てを奪っていく。

悲鳴、怒号、絶叫、発狂。ありとあらゆる負の遠吠えも、初めに比べれば随分鳴りを潜めたものだ。バグズは遥か上空を飛行する使い魔の視界から、戦いの終わりが近いなと考え始めた。

「大穴は無し。概ね予想通りとはいえ、こうも一方的だとやはりつまらないものだな……」

いっそこの混乱に乗じて潜入をして、情報を奪取したほうがいいのかもしれないが、あいにく上司は自分に静観のみを命じた。上の命令が何よりも最優先されるバグズには、考える以外特に何もすることはない。

つまらないな、と思う。先程九人潜入したのは驚いたが、結局傀儡兵に捕捉されて足止めを食らっており、いずれはくたばるだろう。

だが、あのサクル・ゼンベルはまだ生きている。今回依頼した傭兵では間違いなくトップクラスの実力者だろうが、まさか生き残るとは考えもしなかった。

はたして彼はこのまま情報を奪取して、しかも生還できるだろうか？　いや、生還出来ればいいほうだ。情報奪取の余裕などまずないはず。

とはいえ、

「……欲望の推薦なんだよね、彼」

そこだけが気にかかる。レアスキルも膨大な魔力も卓越した技量もない。サクルはバグズの見立てでは、凡人が極限まで鍛練をした

だけの、ありふれた強者でしかない。
これ以上の成長すら期待できない、才能なき哀れな男。その何処にあの天才は惹かれたのか。
興味が湧く。ゾクリと背筋を走る電流に似た欲望。
「いいさ。死ぬにせよ、生きるにせよ……私がここで君を見極めよう。サクル・ゼンベル」
バグズの目が金色に染まり、常人なら見ただけで震え上がるおぞましい気配を滲ませる。
繰り返すが、戦いは佳境。カーテンコールを待ち望むのは、高みで笑う、監視者がただ一人。愉悦に震え、終末に進む闘争にエールを送る。

―

傀儡兵との遭遇は死を覚悟する必要がある。だが、一人だったのならいざ知らず、今のサクルにはククリがいる。先程のように一体だけなら、連携で打倒するのはリスクもそこまで高くはないだろう。
だが二体以上になれば話は別だ。策を練り、それ何とかなるかといったところである。
二人は通路の角に身を潜め、その先をうかがっていた。十メートル程先にあるゲートを挟み、中型傀儡兵が二体。微動だにせず佇んでいる。
その先に何かがあるのは明白だ。もしかしたら例の人造魔導士計画があるかもしれない。

「行くか？」

ククリがデバイスを構え直す。だがサクルは手で遮り制すると、首を横に振った。

「待て。あの様子だと、向こうは俺達にとっての切り札があるとみてもいいはずだ……だからこそ、速攻でケリをつける方法がいる」

「だがここでうだうだしてたらいずれにせよ終わりだぜ？」

「あぁ……」

ククリに言われずともわかっている。だが、無策で突撃しても時間がかかり、下手したら援軍が来て挟撃されるおそれもある。

魔力は最大の六割。武装はメインがデバイス、そしてバリアジャケットの内側にある発煙筒が四つと小口径の拳銃、マガジンは無し。ククリはデバイス以外には、ナイフと大型拳銃が一つずつ。マガジンは三つあるらしいことを、さっき互いに説明し合った。

発煙筒を使用して煙の中行く。だが壁を背にした傀儡兵の背後がとれない以上、先程と同じ弾幕を使っても倒れず、逆に撃ち合いになる可能性は高い。

他に策はないか。こうしてても、いつ傀儡兵が来るかわからない。ならもう無茶を承知で突撃して、撃破するのもありかもしれない。

だがハイリスクすぎる。焦りでギリギリと歯を鳴らす。そんなサクルの心境を察したのか、ククリが肩を叩いた。

「ならここは俺が囮になって奴等を引き付けるってのはどうだ？もしかしたら奴等、あの場から動かないかもしれんが、その時は遠距離からでかいのをかませばいい」

「ククリ……だが、お前が危険だ」

サクルの心配は当然だ。ククリは確かに実力者だが、彼に比べれば劣る。下手したら二体の傀儡兵を引き付ける危険がある。

だがサクルの不安を吹き飛ばすようにククリは豪快に笑い、彼の頭を乱暴に撫でた。

「ハッ、ガキが大人の心配するなんし五年は早ぇよ。心配しなくても無茶はしねぇ……だからなサクル。お前も無理はすんな」

「ククリ……あぁ、わかった」

「よし！　じゃあ早速行くぜ！」

ククリが通路の角から飛び出す。同時、彼を捕捉した傀儡兵達が同時に起動して、ククリ目掛けて魔力弾を撃った。

ククリは距離を取りつつ、自身も魔力弾で応戦を始めた。その姿を追い、傀儡兵も動く。

「サクル！　すぐにそっち行くから先にくたばんじゃねぇぞ！」

弾幕の雨を回避しながらククリが叫ぶ。

二体共にククリに襲い掛かるのを、サクルは援護したい気持ちを堪えて見送った。

そして、門番のいなくなったゲートの前に行くと躊躇いなく魔力弾を放った。

ゲートが砕け、煙が上がる。もうもうと立ち込める煙のカーテンを抜けた先。そこは培養槽が二つと、それらを取り巻く幾つもの機材が置いてあるだけの暗い研究室だった。

サクルはその異様な部屋の有り様に息を飲んだ。別段、怪しいも

のはない室内。
故に、緑色に輝く培養槽の中に眠る少女が、一際異彩を放っていた。

「こ、れ……は」

時間がないというのに、サクルは当惑で一歩後退り、その全貌を改めて見直した。
人造魔導士計画。砂漠地帯に着陸したかのような庭園。意思のないゴーレム。そして目の前の金髪の少女。
頭の中を一気に駆け巡る情報。拭いきれぬ違和感。
導き出される答えはそう。

「プロジェクトF．A．T．E……フェイト……！？」

情報という歯車が噛み合い、サクルの中に眠っていた知識が掘り起こされる。
突然目の前に現れた現実、いや、原作。何故、何故今更こうなったのだ。サクルは込み上げてくる吐き気に、手で口を覆い、目を見開いた。
割り切れ、落ち着け、意識するな。深呼吸を一度、二度、三度――
落ち着く――訳がない。

「……クソッ！　何だ、何で今更……！」

近くにあった機材を殴りつける。それでも身体中を掻きむしる焦燥は勢いを増すばかりで、気持ちを表すかのように全身から汗が滲み出した。
怒りともつかないものがサクルを震わせる。今更だった。今更なんで、諦めかけた前世の願望が沸いて出た。

ふざけるな。ふざけるな。あの日、銃弾代わりのデバイスを手に入れたあの日から、渇望し願った綺麗な世界。デバイスを枕にして夢に見た魔法の輝き。いつかいつかと信じながら、迫りくる戦いによって諦めるようになった場所。

だが何故自分はこんなにも苛立ちを覚えているのだ。ようやく手に入れられるかもしれない、あのとき望んだ世界が、手に入るかもしれないのに。

「そう、か」

だが不意にサクルは理解した。戦いの中、羨望はいつしか愛に、そして行き過ぎた気持ちは『どうして俺をそこにいれないんだ』という憎しみへ変わったのだ。

考えを振り払うようになったのも今ならわかる。無意識的に、自分は望んだものを憎む自分を認めたくなかったのだ。だがこの土壇場で目にしたこれを前にしては言い訳できない。

認めよう。俺は、俺を地獄に置き続けた世界を憎んでいる。

「……ッ！」

デバイスを力任せに機材にぶつけ吹き飛ばし、サクルは荒々しく呼吸を繰り返しながらも、ようやく平静を取り戻した。

少しは溜飲が下がり、サクルは常の無表情を取り戻す。ともかく、今は何もかも忘れて生き残ることを考えろ。

もし手にする情報がプロジェクトF．A．T．Eだとして、培養槽で眠るのがサクルの知るフェイトなら、情報による交渉は無意味かもしれない。

「……」

なら残された手は後一つだ。少女を人質に、この場を脱出する。
考えるが早く、サクルは機材を操作して培養槽の液体を排泄した。
そして眠る少女を解放しようとして――

「あら、人の物を勝手に盗ろうだなんて、傭兵は所詮傭兵ってとこかしら？」

壊れたゲートに立つ女によって、全ての目論見は水泡と化した。

「お前は……」

「何を驚いているのかしら？　勝手に人の庭に入り込んだ汚ならしい盗人のくせに」

サクルがデバイスを向けても、女は余裕の表情だ。
当然だな。サクルはデバイスの先に魔力を溜めながら思う。もしこれが自分の知っているものだとしたら、目の前にいるのはまず間違いなく、あの女にちがいない。

「……プレシア・テスタロッサ」

突然自分の名前を呼ばれ、女、プレシアは僅かに眉を潜めると、小さく微笑んだ。

「私のことを知ってる……元管理局員か何か？」

「……」

「黙ってたらわからないわよ？　まぁ最も……どうせここで死ぬ貴方には関係ないことかしら」

プレシアの周りに魔方陣が展開される。サクルとは比べものにもならない膨大な魔力。

「待て……アレがどうなってもいいのか」

咄嗟にサクルはデバイスを少女に向けた。

プレシアの動きが止まる。行けるか？　サクルが続けて言葉をつむごうとすると、

「ハ、ハハハハハッッ！」

プレシアが突然高笑いを始めた。まるで道化を見ているかのように一通り笑うと、やはり急に笑うのを止め「いいわよ。また代わりを造るから」と、凍てつくくらい冷たく言い捨てた。

「どうせそれはアリシアのために造ったパーツ。スペアをまた造るのは容易よ」

「……」

言うべき言葉が見つからない。自分も大概人として駄目な部類だが、プレシア、この女は間違いなく狂ってる。

沈黙、サクルは彼女の放つ狂気に押され、体が動かせず、プレシアは小動物のように震えるサクルが面白いのか、ニヤニヤと笑むばかりだ。

ともあれ、サクルの万策は尽きた。交渉は不可能、そして相手はオーバーSの大魔導士、プレシア・テスタロッサ。

頬を伝う嫌な汗が気持ち悪い。戦うしかないのだ。サクルは意を決して少女に向けていたデバイスをプレシアに向けた。

瞬間、背後の培養槽がガタリと揺れた。
サクルとプレシア、両者の視線が培養槽に向く。液が抜かれたことによって、少女が覚醒したのだ。
無垢な、真の意味で何もかも知らない少女の瞼が開く。純粋な少女が初めて見た世界の中心、そこには驚愕するサクルの表情が映っていた。
同時にサクルもまた少女を見た。透き通り、何もかも見透かす眼差しが、サクルの奥に潜むヘドロのような感情すら見通しているように感じて、堪らずサクルは視線を切った。
止めろ、そんな清んだ目で俺を見るな。それだけで俺は、自分の矮小さに押し潰されてしまう。

「アリシア……」

視線を戻せば、夢にまで見た我が子が起きる瞬間にプレシアは呆然としている。
意識せずとも、戦い続けてきたサクルの肉体がその隙を逃すわけがない。思考とは裏腹に冷静に動いた体は、バリアジャケットを部分的に解除し、発煙筒を取り出して投げる。
たちまち噴き出す白い煙が研究室を満たした直後、サクルはプレシアの方へ全力で走り出した。

「こ、の……！」

煙の向こうからプレシアの声が聞こえた。幾らまた造れるとはいえ、出来れば壊さずに回収したいプレシアは迂濶に攻撃が出来ない。
魔力を放出し、プレシアは煙を吹き飛ばす。だが煙がと共に消えたのか、サクルの姿はもうそこにはなかった。

「あの小僧……！」

半眼で逃げただろう通路を睨む。
逃がしはしない。プレシアは全身に魔力をみなぎらせサーチをしながら研究室を後にする。
そして、誰もいなくなった研究室で、目を開けたはずの少女はそれが嘘だったかのように再び眠りについていた。
最早そこに、何も知らなかった少女はいない。眠りの中で、少女はいつまでも初めて見た光景を反芻し続けるのだった。

―

走る。走る。走る。走る。
目論見の全てが失敗し、最早策は尽きた。成功するとは思わなかったが、どこかで『自分なら出来る』と考えていた自分を今は無性に殴りたい。
最後に残されたのはＡＡランクの障壁を突破するという、可能性ゼロの無謀を行うことだけだ。
サクルとククリ、二人が全力まで魔力を溜めて放てば、もしかしたら障壁を突破出来るかもしれない。しかし傀儡兵が多数いる広場でそんな魔力を消費しようものなら、真っ先に狙われて他の奴等のように蒸発するのがオチだ。

「……ッ！」

考えろ。考えることを諦めたらそこで終わりだ。まずはククリを探し、合流を果たす。そして二人で脱出方法を考えよう。
故に走る。全力で駆け抜ける。傀儡兵の探索から逃れながら、サクルはククリの姿を探した。

「……あ」

そして、遂に目的を果たしたサクルは、その惨状に愕然とした。

「よ、ぉ……サク、ル」

破壊された二体の傀儡兵。その前には通路の一角に溢れる血。足下を濡らす血の水溜まりの上に、腹部を押さえ蹲るククリがいた。

押さえた腹部から、血がとめどなく溢れていた。ククリは苦痛に顔を歪め、大量の汗を流しながらもまだ意識を繋いでいる。だが傷は深く、すぐに医療機関に運ぶか、専門の治療魔導士の治癒を受けなければならないのは明白だ。

「ククリ……！」

サクルは慌ててククリに駆け寄り治癒魔法をかけるが、かすり傷を治す程度でしかない魔法ではバリアジャケットを貫き内臓まで到達した傷は治せない。

何で、何でお前がこうなっている。唯一の仲間の危険な状態が、サクルの心を恐怖させた。それでも体はククリに治癒を続ける。

「ッ……ヘマ、した。悪いな、サクル」

「黙れ、喋るな」

つたない部分は魔力を多量に消費し、治癒魔法で表面だけ覆う。そしてバリアジャケットを解き、服を脱いでククリの傷口を隠すように巻いた。

見た目はこれで大丈夫かもしれない。しかし流れた血が、これ以

上の戦闘が困難であることを物語っていた。

「ハッ……お前に無茶するな、って言っときながら……テメェが無理しちゃ笑えねぇな」

痛みに苦しみながらククリは自嘲してみせた。場を和ませる皮肉だが、サクルはその言葉に「すまない」と一言。

馬鹿野郎。お前のせいじゃねーよ。震える手をククリはサクルの頭に置いた。

「ククリ……」

「餓鬼が、責任……感じるなよ……おかげで、なんとか大丈夫だ」

そうは言うが、ククリの顔は青ざめ、少しでも気を抜けば今にも意識を失いそうだ。

俺が下手な博打に出ないで、最初から障壁破壊を提案すればこうはならなかったはずだ。悔恨に潰されそうになるサクルは、それでも今はこうしている場合ではないと心を奮い立たせた。

「……行こう。お前の力が必要だ」

ククリの腕を肩に乗せて立ち上がる。体格差からククリを担ぐのは少し難しいが、歩くのに支障はない。

「止めろ。置いてけ、サクル。治癒は助かったが……駄目だ」

そのまま歩こうとしたサクルに、ククリは冷たい声で言った。

サクルは返事をしない。ククリの言い分は最もだ。まだ抗うつもりなら、ここで戦えないククリを連れていくのはゼロをマイナスに

する愚行。
だがサクルは言うことは聞かないし、聞けない。
「サクル……俺は――」
「ククリ、前にも言ったはずだ」
ククリの言葉を遮り、サクルは無表情のまま視線を合わせた。
いつもは感情を表さない冷たい瞳。だがその瞳に微かな炎が灯っているのをククリは感じた。
「俺は主人公だってな」
瞬間、あまりに馬鹿げた言葉にククリは目を見開いた。
真面目な場面かと思えば、どこかで聞いたことのあるあまりにも荒唐無稽な言葉に、ククリは腹が痛むのがわかりながらも笑ってしまう。畜生、かなわねぇよお前には。
「二度ネタってハハッ、なんだそりゃ……！　滅茶苦茶もぐちゃぐちゃで理由にもならねーよ」
「……」
「ならねーが……お前が主人公なら、何とかなるかもな」
「あぁ、任せろ」
それだけは断言する。絶望ばかりしかないから、この希望だけは叫ばないといけない。
サクルは願う。神様。ここらへんで俺が望んだ主人公補正を目覚

めさせていいだろ。物語に必要な絶望はうんざりだ。俺を主人公にしろ。リリカルの世界らしく、ありふれた逆転劇を俺にくれ。間違えて俺を殺した分の力を俺にくれるなら、援軍が来るなり、封じられた力が目覚めるなり、とにかく何でもいい。今すぐククリを救う力をくれ。

出口目指して二人は歩く。先程まで響いていた戦いの音は、いつの間にか聞こえなくなっていた。

もしかしたら、いや確実に自分達以外の傭兵は死んだのだろう。足音と、ククリの苦悶が静寂によく響く。だが傀儡兵は一体も出ることはなかった。

明らかに不自然だが、それでも進む以外に道はない。デバイスを掴む手に力がこもる。頼む神様。奇跡を寄越せ。

「抜けた……」

そして二人は施設を脱出し、広場に出ることが出来た。一面に広がるのは穴ぼこだらけで血の色に光る芝生と、肉片と砕けたデバイスがあるだけの広場だ。傀儡兵の姿は確認出来ない。全員殺したと判断して元の場所に戻ったのか。希望的な推測を、サクルはすぐに否定した。

「ククリ、後はポイントに行くだけだ」

項垂れ、喋る力すらなくなってきたククリを励まして、なるべく目立たないように広場の端へと歩く。

施設から出たとはいえ、障壁は未だ展開され、ククリが動けない現状、サクルは治癒魔法でさらに減った魔力で一人、あの壁を破らなければならない。結局状況は芳しくなく、脱出は依然困難なままだ。

――行こう。悪い方の考えは置いていって、生きる道を進まない

といけない。
死臭を嗅ぎ、躯を踏み締め、眼差しは真っ直ぐに、今はただ生きるため。
だが生存の道は蜃気楼の如く、脆くは崩れ所詮は地獄。
林に入りこんだ瞬間、サクルは突如背筋に走った悪寒のままに、背後を振り返った。
生きようとする二人を嘲笑うように、目の前に無数の魔方陣が現れる。あり得ぬ数の輝きは、これから出てくる絶望に反して、まるで星々の煌めきに似ていて、そう考えれば成る程、手向けの光と見ればその美しい光景も必然か。

「お帰りかしら」

言葉と共に、傀儡兵の群れとプレシアが魔方陣を越えて現れる。無数の絶望を従えた最大の絶望。破軍の将の眼光は、矮小な二人の傭兵を笑うように揺らいでいた。

「せっかちね。折角帰るなら別れの挨拶くらい言わせなさい」

「……」

何となくわかっていた。襲撃なくここまで来れた違和感はこのためだったのだ。後ちょっとというところで、絶望へ一気に叩き落とす。完璧だ。現にサクルは膝を折って屈してしまいそうな自分を感じた。
しかし肩にかかる重みが、膝を折ることを許さない。無駄とわかりながらサクルはデバイスを構え、プレシアへと向けた。
容易く折れるはずだった雑魚の抵抗が意外だったのか、プレシアは腕を組み不快を露にする。

「諦めなさい。あなた達はここで死ぬのよ」

その発言は真実だ。ここにいるのがＳランクの猛者だったとしても、抜け出すことは不可能に近い。総勢五十を越えるＡランク傀儡兵に、大魔導士として名を馳せたオーバーＳランクのプレシア・テスタロッサ。

重傷の仲間を庇い、しかも魔力が最大の半分もないＡランクに届くかどうかの少年に、この戦力の投入はあまりにも異常といっていい。余程自身を虚仮にしたことが、否、目覚めた少女との会合を邪魔されたのが苛ついたのか。

構わない。そんなことはどうでもいい。一秒でも生きてみせる。

生きられる？　生きられる。

「無駄よ」

その考えを読んだかのようにプレシアは断言した。必殺の状況は揺るがない。神の奇跡も祈りもこの場には不用。

語ることはないのか、プレシアが手を掲げると、その手の前に桁違いの魔力が集束された。ただ魔力を集めただけのその一撃は、サクルやその他の人間には荷が重すぎる必滅。

サクルはククリを背中にして、無謀とわかってもラウンドシールドを展開するしかなかった。あの一撃は、ククリを担いで避けられるわけもなく、サクルに彼を置いていく選択肢はない。

愚かとプレシアはサクルの愚行を鼻で笑った。貧相な魔力しかない傭兵が、無謀にも戯れとはいえ自分の一撃を防ぐ。笑ってしまう、絶望を前に自棄になったのかと思うくらいに。

「防げるなら防ぎなさい」

肥大する魔力。

無理だ。逃げないと。仲間なんて知るか。俺は主人公だから生きないといけない。だから逃げよう。謝ろう。許してもらえるまで謝って謝り尽くせ。
弱気な考えが頭に浮かんでは次々に消える。逃げても無駄だし、謝っても無駄だし、ククリは死なせない。

「サクル……！　逃げろ、お前は充分やった……！」

サクルは背中にかかる言葉を首を横に振り否定した。馬鹿野郎、ククリの怒声。馬鹿野郎さ、だって俺は主人こ――

「さよなら」

熱を感じた。一瞬で目の前が光に染まり、微かにラウンドシールドに光が触れたと思えば、瞬きもしない内に破壊されるのは目に見えていて、あぁ駄目だなって思うと同時、体が横に押される。
何もかもがスローモーションだった。緩やかに動く光の奔流と自分。真横に吹き飛んだサクルは、光の中に置き去りにされているククリを見た。

――なぁ、サクル。

一秒もない時間で、何故ククリが言うことが聞こえるのか、サクルにはわからない。ただわかったのは、決死の覚悟でククリの盾になろうとした自分が、光の射線から外れてしまったことと。

――必ず生きろ。

ククリが、ゆっくりと光に削られていき。

――だってよお前、主人公なんだろ？

消し飛んだという、最悪の事実。

「ク――！」

サクルは咄嗟に腕を伸ばしククリを呼んだが、それすら光に溶けていく。

終わりは劇的にでもなくただ無情。半身を熱に晒され、消えていく意識の中、サクルはただ認めたくない現実と、無力で矮小な自分を呪いながら自身もまた光に消えていった。

「……」

そして、何事もなかったかのようにプレシアはその場を後にした。戻る頃には傭兵のことなど頭から消え、アリシアの新たな肉体に異常がないか、そのこと以外何も考えなくなる。

抉られた大地。熱線に溶けたそこに、ククリの跡形すらない。ひたすら無情。ただの事実。結果はここに、戦いの跡地には死骸のみ。

サクルの信じた神などこの世界の何処にもいないのだから、その結末はあまりにも当然の結果にすぎなかった。

次回予告

戦いの後の平穏はここにはない。

あるのは戦火、来るのも戦火、安らぎすらもまた戦火。

骸の上を、躯が歩く。絶え間なく響く悲鳴を聞きながら、炎に炙ら

れ苦痛に歪み、それでもひたすら前を行く。
お前も、お前も、お前も、お前も。
俺のために、全員死んだのだから。

次回『怨嗟』

メッキを纏えど、凡人は凡人でしかない。

第五話【怨嗟】

「アッ……ア……」

奇跡的に息をして歩いている。今のサクルはただそれだけの、消えかけの蝋燭のような存在だ。

ククリの身を呈した犠牲により直撃は免れたものの、プレシアの魔力砲撃は、サクルの展開したラウンドシールドとバリアジャケットを吹き飛ばし、彼の左半身に重度の火傷を与えていた。奇跡というならば、プレシアの、オーバーSの砲撃で火傷ですんだことかもしれない。事実、僅かにでも魔力が足らなかったら、サクルの半身はククリのように消し飛んでいただろう。

だが奇跡もそこまでだ。肺まで焼けただれ、充分に機能しなくなった呼吸器。熱に焼かれ、煮えた水のように蒸発して溶けた左目。所々が炭化し、ケロイドとなった左上半身の皮膚からは骨も飛び出している。左腕は特に重傷だ。肌色の部分はなく、さらには見るも無惨に折れ曲がり、ただついているだけの肉塊でしかない。彼の腕を見た者が二度と動かないことを想像するのは容易だろう。

しかしサクルは生き残った。Sランクすら単騎なら生き残れない戦場から生存を果たした。例えすぐに消える命でも、その驚異は驚嘆に値する事実だ。

そんなあり得ぬ奇跡を為したサクルには、奇跡を喜ぶ気持ちなどまるでない。

あるのは、自身の無力感への絶望、それだけだ。

「ウ、ァ……」

覚束ない足取りで、転送魔法のポイントがある場所を目指してサクルは進む。

痛みすら鈍化した体を引き摺り、半分になったあげく曇ってきた視界の中をひたすら歩く。

ボロボロだった。体だけの話ではない。心もボロボロに砕かれた。

ぐるぐると後悔が頭を駆け巡る。俺は無力だ。誰一人、自分すら救えないちっぽけなクズだ。

だがククリ、何よりもお前を助けられなかったことが、こんなにも悔しい。

「ィ……イィ」

自ら進んでこの依頼を受けた。危険とわかりながら無謀に赴いた。

この結果は自業自得だ。でも、だけどこの終わりはあんまりじゃないか。自分だけ生きて、誰も彼も自分が生きる代わりに死んで。そうじゃない。たまたま、奇跡に奇跡が重なりその上にプレシアの気まぐれがあっただけで、自分のために全員死んだと思うのは自惚れだ。

だがそう思ってしまう。積み上げられた骸の上に立ったサクルには、見えないはずの死んだ彼らの叫び声が聞こえてくるようで。

「リィ……イィ」

サクルは火傷によって傷ついた声帯を鳴らして、掠れた声をあげる。親を探す子犬のように、哀れな声で、サクルは咽ぶ。

それは懺悔だ。偶然が重なって生き残っただけで増長したことへの懺悔。

――ここに白状すれば、サクルは戦うしかない現状を嘆きながら、その一方でどんな戦いからも生きてきたことに小さな誇りをもっていた。

どんな依頼だろうが生き残り、周りから畏敬されていたことを、ふざけた話だが少し喜んでいた。俺はお前らなんかとは違うと。神により転生させられたというちっぽけなプライド、過去へのしがらみがサクルを増長させていた。

ふざけるな。ふざけるな。たまたま生き残っただけのゲスが調子に乗った。その結果がこれだ。この有り様だ。ゲスのプライドが引き起こした現実だ。自分がいれば、ククリ位助けることだって出来るなんて密かに考えた愚かの果てだ。お前のせいで幼いころから自分を気にかけてくれたあの優しい男が死んだんだ。醜いプライドとくだらないしがらみが、尊敬している仲間を――心の中では兄と敬った男を、殺したんだ。

「ク……ィ」

お前が殺した。俺が殺した。何もかも殺した。全てをお前が殺し尽くした。

全部、お前のせいだ。

「ク、グゥ、ィィ……！」

掠れた声でククリの名前を呼ぶ。今はもう何処にもいない彼の名を、自身が殺した彼の名を呼ぶ。

返事はない。どんなに呼んでももう、ククリの野太くうざったらしかったあの声はもうないのだ。

それでも歩くのは、ククリの残した『生きろ』がまだこの胸に残っているから。

「ア、ァァ、ァァ゛……！」

懺悔を受ける神はいない。

無くした左目から血の涙を流して、サクルは草木の一本も生えてない砂漠化した大地に力なく沈む。

微睡みが体を支配し、身体中の力がなくなるのを感じる。胸に宿った篝火も、砂塵の嵐に晒されて、最早『生きろ』という言葉すら遠くに霞み――

「ご……め、ん」

ククリ、お前の最期の願いすら果たせない最低な俺を、どうか許してほしい。

暗転していく世界。最後の力を振り絞り空を見上げようとしたサクルが見たのは、何処かで見たことのある男の金色の瞳だった。

―

体が重たい。瞼を開くことすら億劫で、ならば体を動かすのが難しいのも納得だ。

気分はまるで宇宙から帰ってきた飛行士だ。骨に張りつく筋肉の重たさも知覚できる程全てが重たく、冷静に、そして悲壮感を感じながら、あぁ、俺は生きているんだとサクルは理解した。

「……」

ゆっくりと瞼を開くと、明かりの眩しさに目を細めてしまう。視覚はおぼろ気ながらも『両目共に良好だ』。

次に末端から力を込めていく。その間にも状況把握だ。首を動かし辺りを見渡すが、自分が眠るベッドと右腕に繋がった点滴や医療器具らしき機材の数々以外、これといった物はない。

病院にでも運ばれたのだろうか。いや、そもそも俺は――

何で生きているんだ？

「……ッ！」

サクルはたまらず顔をしかめた。総身を走る負の感情。重くのし掛かる亡者の嘆きが、傷一つない体を蝕む。

震える体を両腕で抱き締めて押さえつける。はっきりとしてくる意識と共に、全ては自業自得とわかっていても、あの女の顔ばかりが脳裏に浮かんでは両腕に力を込める。

自責に潰れそうなサクルをこうまで震わせるのは、ひとえにプレシアへの怒りがあったからだ。自分で納得し、返り討ちに合い、そして死んだ。

だからどうした？　だからってククリを殺したあいつを許せというのか？

違うだろ。違うだろサクル・ゼンベル。全てが身から出た錆なら、これからも錆を落とせばいい。自業自得と言われようが、あいつがククリを殺したんだ。

「プレシア……テスタロッサ」

敵の名前を口に出すと、余計に怒りが込み上げていく。そして脳裏に浮かぶもう一人の男。
バグズ。確かそういう名前だったはずだ。録な情報も回さず、結果としてあいつがいたためにサクル達は死に追いやられた。
歯を食いしばり、眼に怒りを宿す。必ず、必ず奴等を殺してやる。
だが同時に、そんな依頼を受けた挙げ句、ククリを守れなかった自分への怒りも確かにあった。
震えの収まった体から腕を離し、手のひらを見つめる。弱々しく痙攣する両手があまりにも頼りない。こんな手で、自分はククリを守ろうとしていたのか。

「……ハッ」

乾いた笑い。自身を嘲笑う。おこがましい考え方だ。こんな手で、一体誰が守れるというのか。そして、こんな手であの二人を殺せるというのか。
客観的に考えれば無理だ。プレシアは原作通りなら武装局員を一蹴する実力を持ち、さらにはAランクの傀儡兵を多数抱え込んでいる。そしてバグズに関しては、どんな後ろ楯があるかわかったものでもなく、そもそも依頼完了したときの合流場所も登録していたデバイスもない今、何処にいるかさえ見当つかない。
なら先にプレシアを殺すべきか？　それならやり方は簡単だ。いずれ来るだろう原作に介入するため、直ぐにでも地球に向かえばいい。そこで原作に関わりながらプレシアの元に行き――
そこまで考えて、サクルはプレシアが結局死ぬことを思い出して唖然とした。しかもその死に様はあるはずもない夢を求めて、勝手に自爆するという滑稽な死に様。
なら、俺が何もしなくても死ぬなら。俺達があそこで戦った意義とはなんだった？
不意に過ったどうしようもない事実に、サクルは冷水を頭からか

けられたかのように顔を青ざめさせた。仮にこの世界がどうしようもなく『リリカルなのは』なら、自分の苦難、ククリの願い、これらは何だ？

何のための人生だったのか。

何のための戦いだったのか。

何のための犠牲だったのか。

「俺、は」

片手で顔を覆い、変わらない世界が訪れるかもしれない現実に恐怖する。流した血も、失った命も、全てはリリカルなのはという綺麗な世界に――何も影響を与えていない。

「俺達は」

世界は変わらない。神に願った『リリカルなのは』が叶ったのならば、世界はそのまま進むだろう。

今こうしている間にも失われる全ても意味をなさず、ただただ世界は変わらず。

「俺達は、何で生きた？」

所詮は、画面に映ったことも設定にすら出たこともない、モブキャラ以下の有象無象。

それが、自分達。

「うっ……」

込み上げる吐き気を堪えられず、サクルは床に胃液をぶちまけた。胃袋には何もないのか。腹が減っているのも納得だ。

「ぐ……そ」

酸味のする口を拭い悪態をつく。まとわりつく怨嗟の声すら遠い。例えどんなに死が重なろうとも、世界はその程度では変わらない。

変わらずジュエルシードを奪い合い。

変わらず友情を育み。

変わらず闇の書を巡り争い。

変わらず未来を信じて。

その通りに悪は消え、綺麗な輝きばかりが残る。

サクルが何もしなくても、それは必然として確定された未来なのだろう。

何故なら、サクルが前世にそう願い、そうなるべき世界にサクルは転生したのだから。

だが神はサクルの願いを一つしか叶えなかった。主人公らしい最強の力も、固い友情も、優しい愛も、何もかもを彼に与えなかった。

残ったのは自責に潰れかけ、復讐しようにも、願った世界にその復讐すら意味なしと断じられた自身の身一つ。

「ククリ、俺は……」

俺達は。そう続けようとした瞬間、部屋の扉がゆっくりと開いた。

「目覚めたかい？」

現れたのは学者らしい白衣を着た男と、これまた白衣を着た、今まで見たこともないような美貌の女性だった。

女は床に広がる胃液を一瞥すると、右手で空間に現れたキーを操作した。直後、部屋に雑巾とバケツを持った小型ロボットが入り、床を掃除した。

「体調は……聞くまでもないか」

「あぁ、最悪だ」

サクルの返しに、男は金色の瞳を愉悦に細め、ベッドの隣に立った。

普段なら油断なく男を警戒しただろうサクルも、今は何かする気にもなれず、ただニヤニヤ笑う男を見上げるばかりだ。

「左眼球蒸発。左半身に治療不可能の火傷。肺は機能を九割喪失、そうでなくても無事な内臓は一つもなく。左腕は付いているだけの肉の塊となり、唯一無事と言えたのは脳味噌と右半身の一部。以上の怪我が、おめでとう、完治だ」

「……」

「どうした？　少しは喜ぶといい。『普通なら』死んでたはずなのだから。そもそも生きてるだけで奇跡なら、完治したのは最早異常だと言ってもいい」

愉快に語る男の言葉は、本来彼の言う通り異常だった。言葉通りならサクルが生き残ることはあり得ない。

死んで当たり前の怪我。なら生きて、しかも完治したのは異常の産物。

「レアスキル……いや、その枠組みにも収まらない特異技能、特異生命体」

金色の眼がサクルを射抜く。実験動物を見るような、人を人と思

わぬ魔の眼差し。

「初めましてサクル・ゼンベル。私の名はジェイル・スカリエッティだ」

吐き出された名前。サクルの目に驚愕が浮かび、堪らず男、スカリエッティの顔を見た。

冷たく、だが興味深く自分を観察する彼の瞳に舐められて、

「ジェイル・スカリエッティ……無限の欲望だと？」

紡がれる一言を皮切りに、サクルは瞬く間に背後に控えていた女に首を掴まれベッドに押し付けられた。

次回予告

少女の名前。少女の記憶。愛された記憶。愛された名前。

どれもが自分の過去ならば、受け付けられぬ現実は過去の残した戒めの鎖か。

フェイトの名前。フェイトの記憶。アリシアの記憶。アリシアの名前。

相反を感じさせるのは、あの日あの時あの瞬間見てしまった男の顔が焼き付いてるから。

次回『テスタロッサ』

これは、リアルだ。

第五・五話【契約】

肺の空気がなくなり、掴まれた首がミチミチと軋む。サクルはたまらず首の手を両手で掴み、引き剥がそうと試みたが、たかが女の細腕は、万力のようにサクルの首から離れない。

「何処でそれを？」

美貌の女が眼を金色に輝かせサクルを見据える。機械のような冷たさ。否、事実、目の前の女は機械なのだろう。

サクルは血色が変わるのを自覚しながら「ハハッ」と吐き捨てるように口を吊り上げた。

「何が可笑しいのかしら？」

「い、や……」

いぶかしげな女を他所に、サクルは狭まる視界の奥で、あまりにも無用心な自分を笑っていた。

同時に、何故全てが磨り減った今さら、こうして原作と関われるようになった己の境遇が可笑しかった。

サクルの正気を疑う女にはわからない。その隣で笑う陰湿な科学者にもわからない。彼だけが笑える。知っているから笑える。

「……放、せ。喋れない」

笑いもそこそこに、いい加減意識が朦朧としてきたサクルがそう言うと、女はスカリエッティを一度見てから渋々といった風に手を放した。
解放された途端サクルはむせる。満足いかなかった呼吸を再開させ、まだ生きてる事実を改める。

「お前は、ウーノか？」

そしてサクルは半信半疑ながら女に向かって名前を呟いた。

「ッ……」

「そうか」

体を震わせ、驚きを露にする女を見て、やはりと得心。

「スカリエッティ」

「なんだい？」

「他の戦闘機人は何体まで起動している」

「これはこれは……」

はたして、僅か数人以外誰も知らないはずの、少なくとも一介の傭兵ごときが知ってるはずのない情報を聞いたスカリエッティは、軽く驚いただけであまり動揺していなかった。
むしろどうやってその情報を得たのか。そのことに興味をもっている始末だ。

「聞いてどうする？」

「確認」

「確認？」

「どうやら、俺は本当に――なのはにいるらしい」

決定的だった。これもまた今さらだが、自分が本当に物語の中にいることを理解した。

そして、自分が漏らした言葉の危険性もまた然り。知らない情報を知っている人間がいる。しかもその情報が外部に漏れたら危険な代物であるなら、サクルの今後がどうなるかは決定的だ。

よくて監禁、拷問。まず間違いなく死ぬ。

だがそれでもよかった。いつか思ったことだが、サクルは疲れていたのだ。

終わらない戦い。

始まらない安息。

なのに死だけは続いてる。

「殺すなり、好きにしろ」

限界など、それこそこの世界に来た瞬間に超えていた。肩に乗り掛かる死神に、足を掴む死んだ人間の骸が、サクルを奈落に落としている。

落ちなかったのは奇跡が奇跡のように積み重なっただけ。決して自分の実力ではない。

だからサクルは疲れて、果てた。そしてククリの死と、その復讐すら出来ないことを理解した瞬間、サクルの全ては砕けたのだ。

思わず無限の欲望と呟いたのも丁度よかった。何もかも吐き出して、いっそ全てを滅茶苦茶に出来れば、この煤けた人生にも意味があったというものだろう。

「そういう訳にもいかないな」

だが自棄になりかけのサクルに反して、スカリエッティの興味は増すばかりだった。

正直に言おう。スカリエッティをもってしても、目の前の人間をどう扱えばいいかわからなかった。あり得ない情報を知っている時点で、より扱いは難しくなったといってもいい。

「君は、君が思う以上に最高の素材だ」

だからこそ、この言葉に偽りはない。訳がわからない。スカリエッティにとって未知とは最高のご馳走だ。

ただでさえ『目の前で再生した』ばかりか、外部にまだ漏れてないはずの情報すら知っている。笑いを堪えろというほうが無理だった。

「実に素晴らしい。たまらない。君こそ私が求めていた『生命』だ」

情報を何処で得たのかはこの際いい。スカリエッティにとって重要なのは、理解の外にサクルが存在するという一点。

「……」

最早、愛の告白に等しいスカリエッティの言葉に、サクルはただ唖然としてしまった。

普通なら、スカリエッティの隣で驚愕する女、ウーノの反応が当

然だ。
だが、この狂気の科学者、ジェイル・スカリエッティは違う。それすら『面白い』と思っているその底知れぬ器。もしくは気が触れているといってもいい。
彼は故にサクルを求め、その在り方に、サクルは初めてなのはの登場人物に恐怖した。

「……殺さないのか？」

「まさか！　いや、白状すれば君がここに運びこまれた時点で、何度か殺そうとはしたのだが……全てが全て、嬉しいことに失敗した。まず初めに、友人に連れてきてもらった直後に回復した君を、動かないように固定してから、質量兵器の射撃を――」

そしてスカリエッティは語りだした。如何にしてサクル・ゼンベルを殺そうとしたのかを嬉々としてだ。
その中には凄惨極まるものもあったが、それ以上にサクルが気になったのは。

「氷点下の放置も失敗した私は、ならば発想を変えて灼熱に放り込もうとしたのだが、溶鉱炉に落とした直後に――」

「スカリエッティ」

「と、なんだい？　すまないね。話し出すととまらない口なんだ」

未だ醜悪な笑み―何となくだが、これが普通なのだろうと薄々感じてきてはいたが―を浮かべるスカリエッティを睨み、話の始め、そう、サクルは一体、

「俺を運んだのは友人は？」

誰に連れ出されたのかということだった。

「あぁ……まぁ気になるだろうね」

何となくその質問の意味を察したスカリエッティは、勿体つけるように一呼吸置くと、

「バグズ。君を死地に叩き込んだ男さ」

その真実を突きつけた。

「ッ！」

瞬間、萎えていた気持ちが一気に膨れ上がる。奥歯を噛みしめ、サクルはスカリエッティに飛びかかりそうな自分を律した。

「……あいつについて、教えろ」

怒気が滲む。最早、サクルにとって原作に絡むのはどうだっていい。

どうせプレシアは死ぬのなら、せめてあの男だけでも。直接的に手を下した訳ではない。だがしかし、彼がもっと正確な情報をこちらに渡せば、ククリは死ななかったかもしれない。

だからあいつに報復を。サクルな熱に浮かされた瞳に睨まれながら、しかしスカリエッティは怯まない。

「復讐か」

「笑うか」

「勿論。受けた仇を返せない人間に、受けた恩を返せるわけもないとも言う。それともここは基本に忠実に、復讐は不毛だとでも涙ながらに訴えようか？」

「やめろ。キャラじゃないだろ」

「よくわかってるじゃないか」

クツクツと肩を揺らし、スカリエッティが笑う。その笑みの内側で、ろくなことを考えてないのは明白だろう。

「それで」

「うん？」

「奴について教えろ」

「あぁ……」まるで忘れたかのような仕草を一つ、スカリエッティは一呼吸入れ「知ってるも何も、彼は私の友人だよ」と、あり得ないことを口走った。

「な……」

「どうやらこのことについては知らなかったみたいだ。戦闘機人を知りながら、私の交友は知らない……ふむ、君は戦闘機人関連でしか私を知らないのかな？」

サクルが見せた僅かな無知のみで、僅かに真実に近い推測を立て

るスカリエッティの言葉も耳に入らない。それ以上に、なのはに存在しないはずの第三者がいる事実が、サクルを混乱させていた。

「さておき彼のことか。今はバグズと名乗っているが、コードネームは『無限の欲求』。脳のスペックを弄った怪物が私なら、彼はリンカーコアを弄った怪物。簡単に説明するなら以上で終わりだ」

だがサクルの内心など気にせずにスカリエッティは言葉を重ねる。怪物。スカリエッティすら認める異端存在。混乱する思考とは裏腹に、その情報はサクルの中に記憶されていく。

「怪物？」

「そう、管理局が現在、表向きにはいないとしている最高ランクのＳＳＳ＋。それが彼を怪物たる所以さ」

「ＳＳＳ＋、だって？　そんなバカな！？」

嘘を並べて自分を嘲るつもりと思ったサクルが声をあらげる。ウーノがその剣幕にスカリエッティとの間に立ったが、スカリエッティはその肩を叩き横に退かすと、ぎらついたサクルに近づき、ぎらつく目を観察するように覗き込んだ。

「嘘をつく必要があると？」

「お前はそういう……ッ！」

「おや、そういう風に断言出来るほど、君は私を知っているのか」

「……ッ！」

反論出来ない。サクルは、スカリエッティが今ここで嘘をつく必要がないことがわかっているし、そもそもスカリエッティのことは画面ごしでしかしらないのだ。

「でも、だったら……」

あり得ない。サクルを微塵も寄せ付けなかったプレシアすら、戦いが専門でないのにあの実力だった。

だというのに、オーバーSの最上級。あいつも、あの男も圧倒的な強者。

「……だとしても」

だが、バグズは死なない。プレシアのように惨めを晒さないのなら、戦う意味はあるはずだ。

「俺は、奴を殺す」

誓いが溢れた。瞬間、様々な葛藤が彼岸に行き、ただ真っ直ぐな怒りだけが総身を支配した。

そのことを理解したのか、スカリエッティは意味深に頷くと、「なら、話は早い」そう言って、右手を差し出した。

何のための手なのか。疑問に目を細めれば、「契約をしよう」相変わらずの憎たらしい笑顔のスカリエッティ。

「契約？」

「あぁ、契約だ。どうだい？　損はさせないよ」

目の前の手は、掴めばきっと最悪への引き金になるだろう。原作を見ればわかる。終わりはきっとまともじゃすまない。

だがそれでも、それが終わりに繋がるならば――

「さっきも言った」

「それはつまり」

「変わらないさ。好きにしろ」

地獄への片道キップも悪くはない。

第六話【テスタロッサ・1】

日課である日記を書くのもほどほどにして、金髪の愛らしい少女がベッドに沈む。その目には今にも溢れそうな涙が光っているが、それを流さないように少女は健気に天井を見つめて堪えていた。

――自分を信じられない。信じようがない。何故なら刻まれた記憶を実感出来ないから。

本当に自分はフェイト・テスタロッサなのか。誰にも相談せず、今もこの胸で騒ぎ続ける疑問。まだ『生まれたばかり』の少女、フェイトは、辛いことや悲しいことがあると、ベッドに座り膝を抱き抱えて、言えない悩みに葛藤してしまう。

記憶が正しければ、フェイトはある日大きな実験の被害に会い暫く眠っていたらしい。起きた後に母からそう言われ、記憶の最後も、確かにベランダに出たら何かが光って記憶が途絶えている。

だがフェイトは記憶が信じられなかった。何故かは知らないが、自分が見聞きして蓄えたはずの記憶が、何かの映像を見せられているようにしか思えなかったからだ。優しかった母の笑顔も、無邪気にはしゃぐ自分も、あの日二人で食べたご飯に、妹が欲しいと駄々をこねた瞬間も。

――だって、母さんは私を『アリシア』って呼んでいる。

全てが全て他人事にしか思えず、フェイトはかつての自分を信じられなかった。

起きてから暫くして冷たくなった母の態度も、記憶の正しさを信じられないことに拍車をかけていた。本当は自分が自分ではないから、あぁして冷たい態度なのではないかと、今だってプレシアに素っ気なくされて、フェイトは心苦しさに塞ぎ込んでいるのだから。

ならば、フェイトがフェイトの記憶として正しく認識出来るのはどこからか。プレシアの笑顔も、無邪気な自分も、破滅の瞬間も、何れも自分のものだという確信がないのだ。

思い起こすのは、冷たい水とガラスの感触。

「母さん……」

暗い室内。遠くから自分を見て今にも泣きそうな表情で微笑む母、プレシア。あの優しげな姿が脳裏にあるから、フェイトは例えそれ以前の記憶が信じられなくても、プレシアが大好きだった。どんなに記憶を積み重ねても色褪せない、自分を見て感激する母親の慈愛に満ちた姿こそ、フェイトがプレシアを嫌わない理由だ。

そしてもう一つ。誰なのかもわからないのに、ただ目が合っただけだというのに、こんなにも自分の胸の中に刻まれている。

それは、遠くの母親よりも自分のすぐ近くで、苦しそうな眼差しで見つめてくる傷だらけの少年。

「……お兄さん」

少年のことを呟き、思い出せばほら、悲しかった顔にも不思議と笑顔が戻ってくる。

信じられない記憶の中、唯一自分のだと認識出来る記憶に住む、母と少年の二人。優しそうな母と、傷が痛々しい少年。

少年の名前を知らないフェイトは、彼が兄なのではないかと考えていた。傷だらけ、もしかしたら危ないことをしているのかもしれない。

記憶の正しさに葛藤しながら、いつだってこうして記憶は振り替えるのはそう、おそらく自分より大変なのだろう少年を思い出しては、もう少し頑張ろうとやる気を出せるからだろう。

「うん……頑張れ、私」

プレシアにはこのことを話していない。もし言ったら、今より冷たくなってしまうかもしれないと思うからだ。

多分、事故の影響か何かなのだろう。幼いながらに達観した思考でそう自分に言い聞かせた。

「失礼しますよフェイト」

と、不意に部屋の扉が開き、見知らぬ女性が中に入ってきた。警戒心からか、後退りするフェイトを見て女性が苦笑する。

「アハハ、すみません。少しビックリさせちゃいましたね。私はリニス、今日からプレシアにあなたの教育係を任されました」

明るい口調で語るリニスは、フェイトが初めて出会う快活な人間—使い魔ではあるが—だったため、人見知りからか軽く会釈するだけだ。

最初はそんなものだろう。リニスは笑顔で「よろしくお願いします」と言うと、フェイトの側に寄り手を差し出した。

「あの……」

「握手です。友好な関係のためには大切ですよ」

リニスの顔と手を見比べ、フェイトは意を決して彼女の手を握っ

た。

「あっ……」

起きてから直ぐに触れたプレシアの手から、他人の体温を感じたことがなかったフェイトは、リニスの暖かな手のひらに驚き、知らず、目頭を熱くさせてしまった。

「えっ？　えっ！？　そ、そんなに嫌だったのですか！？」

「う、うぅん……違う。その、なんか、嬉しいのに……私、変だ」

慌てて手を離そうとしたリニスの手を強く握り、空いた手でフェイトは溢れる涙を拭う。

まだまだ幼い子が、手を触れるのにも怯え、その暖かさに涙する。その意味することを何となく察して、リニスは表面上は笑顔でいながらも、内心は複雑だった。

つい先程、プレシアによって作られた彼女だが、精神年齢という点ではプレシアと同じくらいである。だからこそ、娘であるフェイトを自分に任せ、ただ『使えるように教育しなさい』とだけ言われたのは疑問だった。

「……」

リニスはそれ以上何も語らず、フェイトをそっと包み込んだ。

事情はわからずとも、この小さな少女が、どんな苦労をしてきたのかくらいはわかるつもりだ。

何せ、温もりを享受するのが当然の少女が、温もりに涙するなんておかしすぎる。

「大丈夫。大丈夫ですよフェイト」

冷えきった彼女を包み込む。せめて、この瞬間だけでも辛い出来事を忘れられるように、と。

―

それから、リニスとテスタロッサ親子の微妙な生活は始まった。研究室にこもり、食事と排泄と風呂以外にそこから出ないプレシア。そんな彼女に認められたいがために魔法の練習を頑張るフェイト。その二人を見守り、親子の関係の橋渡しを出来ないか悩むリニス。端から見れば奇妙な関係だっただろう。

だが始めの一年は、それでも穏やかな一年だったと思う。フェイトとの会話を極力避けようとするプレシアに、毎度注意するリニスがプレシアと口論となることはあったが、その程度の小競り合いしかなかった。フェイトは順調に魔法の腕を上げていき、この調子なら、もう半年もしない内に自分の役目がなくなるだろうとリニスも思い始めていた。

そんなある日、フェイトから相談があると言われ、リニスとフェイトは庭園の外にある大きな木の下で並んで座った。

「あのねリニス……私……」

普段よりさらに歯切れの悪いフェイト。リニスはその深刻な様子から、魔法による悩みではないなと勘づいた。

「大丈夫。どうしました？」

「あ、あの……私、実は……」

フェイトはそこで一端言葉を切ると、深呼吸を一つ、勇気をかき集めるように胸に両手を置いた。

「私、本当に母さんの子どもなのかな？」

その一言を皮切りに、フェイトは次々に思いの丈を吐き出した。事故より前の記憶では、自分がアリシアと呼ばれていたこと。事故前と後で全然違うプレシアの態度。

そして、その中間にある、一瞬だけの確かな記憶。

その全てをフェイトは打ち明けて、静かに泣いた。溜め込んだ思いを全て言えたからか、あるいはこのことを言ってリニスに嫌われると思ったからか。

いずれにせよ、リニスはフェイトを抱き締めて「今までそれを一人で抱えて辛かったでしょう」と言って、ただ慈愛に満ちた笑顔を浮かべた。

「頑張りましたねフェイト。いっぱいいっぱい、頑張りましたね」

「う、うぅ……」

言葉も出せず、フェイトは咽び泣く。ようやく言えた己の罪。伝えるだけで、フェイトは救われていた。

一方、フェイトの告白を受けたリニスは、どうしてプレシアがフェイトに冷たかったのかの理由を知り、一つの決意を固める。

――どうしてそこまでフェイトにきつく当たるのですか？

自分がフェイトの教育係としていられる時間も短い。この調子でフェイトが成長すれば、半年、あるいは一年程か。自分の教えられることはなくなるはずだ。

幸い、フェイトのデバイスであるバルディッシュももう少しで完全する。代わりの使い魔候補も出来た。

心残りは、二人の関係だけだ。千切れかけている親子の絆を再び繋ぎ合わせる。

切っ掛けは今しかない。フェイトの語った真実が、リニスに覚悟を決めさせた。

「全部、私に任せてください」

柔らかな金の髪を撫で付けて、リニスは強い決意を瞳に宿した。

―

日に日に焦る毎日が続く。どんなに研究を重ねようと上がらない成果。体を蝕む病魔の影。それらがプレシアの今を追い詰めていた。

「これでもない！」

先程まで書いていた資料を払い退け、プレシアは肩で大きく息をしてから、苦痛を滲ませ吐血した。

「くっ……時間が、ない」

妄執と言いたければ言えばいいだろう。自分が産み出した幼い少

女を放置するのは外道だと、蔑みたければ蔑めばいい。
だがプレシアは、アリシアと再び日々を過ごしたかった。あの優しい毎日を取り戻したかった。
そのための手段であったプロジェクトFは、アリシアとは似ても似つかないフェイトという少女を作っただけに終わった。アリシアとは違う、似てるからこそ、細部の違いがプレシアを苛立たせる。

「……」

だがそれでも、最初は嬉しかったのだ。あの日、培養槽で目覚めたあの時、どんなに嬉しかったのかわからない。
馬鹿馬鹿しい。プレシアは頭を振って、あんな偽物が目覚めたことを喜んだことを否定した。自分の娘はアリシアだけなのだ。あんな木偶人形と一緒にするのはおこがましい。

「あぁ、許してちょうだい……アリシア」

プレシアは培養槽な中で眠るアリシアを、虚ろな眼差しで見上げた。
ガラス越しに触れ合い、痛みと焦燥に忘れてしまいそうになる誓いを新たにする。

「必ず助けてみせる。必ず……」

死んだ我が子を蘇らせる。それは生命の禁忌に触れる所業に違いない。だがそうすると決めた。そのために自らの手も汚した。
だからもう、後には引き返せないのだ。

「アリシア……アリシア」

冷たいガラスごと我が子を抱き締め、プレシアは束の間の眠りに沈んでいく。
自分が産み出した現実には目を向けず、ただいつかの優しい記憶に包まれながら、プレシアは自分の中に芽生えている気持ちも偽って、たった一人で道なき道を進むのだ。

―

黒く輝く鉄の存在感。初めて目にする鋼の風格に、フェイトは年相応に瞳を輝かせた。

「わぁ……見てアルフ。凄いカッコいいね」

少女には大きすぎる鋼だが、見た目以上に軽いのか、容易く片手で扱える。
器用に鋼――インテリジェントデバイスのバルディッシュを振り回すフェイトを、その使い魔であるアルフが「フェイトカッコいい！」と、バルディッシュが回るのに合わせて尻尾を振り回し褒め称えた。

「フフッ、気に入ってくれたみたいですね。私も作ったかいがあったというものです」

「リニスありがとう！」

「リニスはやるねぇ」

幼い二人の感謝に微笑みで返し、リニスは微笑ましい光景に目を細めた。
あの告白から暫く、フェイトには使い魔のアルフが出来た。フェイトを第一に考える彼女ならば、きっとこれからの長い人生でフェイトの支えになるはずだ。
そして、バルディッシュと名付けたインテリジェントデバイス。今はフリスビー代わりになり、虚空に舞い、アルフにキャッチされるのを繰り返され『Ｈ，Ｈｅｌｐ……』などと情けない声を出してはいるが、いずれフェイトの身を守る力として役に立つ『Ｎｏｏｏｏｏｏ！！』はずだ。多分。

「次は棒高跳びしてもいいかなアルフ」

「じゃあ私はチェーンバインドでバーを作るよ！」

『ｓ，ｓｉｒ？』

「バルディッシュはポール役お願いね」

『ｏｈ……』

告白をしてから、フェイトに笑顔が増えてきたのは気のせいではないだろう。今までは言わなかった我が儘も少しずつ増えもした。そこには自分だけでなく、アルフがいたおかげなのもあるだろう。
何にせよ、今まで抱えていた不安が取り除かれ、未だプレシアの前では萎縮するが、前向きになってきたのはよい兆候だった。
フェイトが本来持っていた明るさが戻り、いつかは――

（そう、いつか……プレシアにもこの笑顔が伝わったら）

そのときこそ、自分の教育係としての役割は終わりを告げるのだろう。
こんなにも優しさに満ちた世界がすぐ側にあることを、プレシアにはわかってもらいたい。
何故なら、リニスはフェイトの教育係である前に、プレシアの使い魔だから。主人の幸せこそが、何よりの望みなのだから。

「フェイト、アルフ、バルディッシュ」

笑い合う（一部悲鳴）彼らをリニスは呼んだ。フェイトとアルフ、そして機械なのに今にも泣きそうに点滅しているバルディッシュ、それぞれがリニスを見る。
大事な大事な自分の家族。その姿を目に焼き付けるようにジッと見つめると、フェイトとアルフの頭を撫でた。

「リニス？」

突然のことに首を傾げるフェイトだが、すぐに目を閉じるとリニスの手のひらに自分の頭を委ねた。
初めて会ったとき手を握るのすら躊躇った少女も、今は甘えることにだいぶ慣れた。そうだ、この姿こそが普通なのだ。
リニスは腰を屈めると、二人の目線に顔を合わせる。

「少しプレシアの所に行ってきます。ご飯はいつもの場所に置きましたので、陽が落ちるまでには戻って食べてくださいね」

アルフは「はーい」と片手を上げて快活に答え、フェイトもいつもと雰囲気の違うリニスを不思議には思ったが「わかった」と言った。

リニスは二人の返事に笑顔で頷くと、踵を返してプレシアの元へと歩いていく。

「フェイト、次は何する？　……フェイト？」

去っていくリニスをいつまでも見るフェイトの肩をアルフが叩いた。

「あ、うん……」

笑顔のアルフと二人、僅かに過った不安を振り払うように笑顔でこう言った。

「じゃあ次は野球してもいいかなアルフ」

バルディッシュは絶望した。

―

「やっと、やっと出来た！」

プレシアは大量の紙がばらまかれた部屋で、遂に自分の望んだ成果が見つかり歓喜していた。

虎の子だったプロジェクトFは頓挫し、最早現行の技術ではアリシアを救うのは不可能と考えた末、プレシアが求めたのはおとぎ話とされている国。アルハザードだった。

古い文献から、絵本まで。アルハザードに関連する資料とあれば

あらゆる物を手に入れ、分析し、ようやく座標の特定にまで漕ぎ着けた。
だが問題はまだある。次元の狭間に閉ざされたアルハザードへの道を開くには、莫大なエネルギーが必要となる。それこそかつてアリシアを奪った忌々しい事件を超える量のエネルギーがだ。
しかし道は開けたのだ。エネルギーの問題はあるが、そんなの条件に見合ったロストロギアを見つければいいだけの話。

「そうよ。そして私はまたアリシアと一緒に……」

胎児のように丸まり、まるで眠っているかのようなアリシアを培養槽越しに慈しむ。今は触れないが、いつかきっとこの手で抱き締められる日が来るのだ。

「すみません。プレシア、入ってもよろしいですか？」

アリシアとの触れあいに、第三者の邪魔な声が入る。プレシアは僅かに眉を潜めると、アリシアを転送させて「いいわ。入りなさい」と言い扉のロックを解除した。

「失礼します」

自動で開いた扉。来訪したリニスは、いつも通りとはいえ紙が散乱した部屋を見て顔をしかめた。

「プレシア。先程、フェイトにデバイスのほうを渡しました。後はバルディッシュの使用方法を教えれば、私に与えられた目的は完了します」

「そう」

プレシアの返事は簡素なものだ。目的を果たす。それがつまり、リニスとの使い魔契約が終わる――リニスの死であることを意味するということなのに。

あまりにも冷たい主人の言葉に、リニスは仕方ないなと苦笑を漏らした。結局、今日このときまで、彼女との信頼関係だけが築けなかったことを寂しく感じる。

でも、だからこそ、この関係を自分がいなくなった後にフェイトへ引き継がせたくなかった。リニスは、両手に抱いたフェイトの部屋から持ってきた数冊の古びたノートを握りしめ、すでにリニスではなく新たな資料を見るプレシアにただ一言。

「もう、やめませんか？」

と、悲しげに目を伏せて呟いた。

資料を捲る手を止めてプレシアがリニスを見る。まるで何を言っているのかわからないといった風な眼差しを、リニスは直視することができなかった。

「プレシア、あなたの気持ちもわかります。ですが、そのせいであなたの子どもであるフェイトが――」

「ふざけないで！」

リニスの悲痛を遮り、プレシアが怒りに顔を歪めた。

普段なら不愉快だが軽くあしらったかもしれない。だがようやくアリシアを目覚めさせる方法に届き気が僅かに緩んだプレシアには、リニスの言葉は許容できるものではなかった。

「あの子が私の娘！？　馬鹿を言わないで、私の娘はあんな紛い物

ではないわ！」

「な、にを……」

「えぇそうよ。所詮あれはアリシアが蘇るのに役に立つだろうから手元に置いただけの人形でしかない。私のアリシアとあれを一緒にしないで！」

「……！」

リニスはプレシアに近づくと、感情の赴くままに彼女の頬を叩いた。

「フェイトは……！　あの子がどんなにあなたを！」

最早、言葉にはならなかった。涙を溢れさせながら、腕に抱いたノート――フェイトが書き記した日記――に宿る想いがリニスには辛かった。

言ってやりたかった。フェイトが、プレシアに避けられて、自分の記憶も信じられないのに、それでもプレシアに喜んでもらえるよう努力したフェイトの想いを言って、分からせたかった。

だが、それはリニスの役目ではない。本当は言いたかったけれど、この家族の絆を作るのは、自分の言葉ではない。

「……あなたが言うアリシアのことは知ってます。失礼ながら、密かに調べさせてもらいました。アリシアがどうなったか、そしてフェイトがどのようにして産まれたのかも」

「だったら！」

「それでも！　フェイトはあなたの娘です！　どんなにあなたが突き放しても……フェイトは！　フェイトは！」

あの日、記憶を疑うフェイトの告白を受けてから、リニスは密かにプレシアの研究室を調べていた。そこで、アリシアとフェイト、二人がどんな関係にあるかを知り、何故記憶が間違いなのかの理由もわかった。確かに明確にはプレシアはフェイトの親ではないかもしれない。しかし、それでも二人は親子なのだ。

そのことを上手く言えない自分がもどかしい。だが、言葉の代わりは確かにこの手にある。

リニスは持っていたノートを資料の散乱した机に置いた。

「プレシア、私からはもう何も言いません。ただ、もしあなたが僅かにでもフェイトのことを思う気持ちがあるなら、どうかそのノートを読んでください」

願わくは――それ以上は告げずに、リニスは研究室を後にした。閉まる扉。叩かれた頬を押さえて、プレシアは身体中をかき乱す気持ちを持て余していた。

自分は正しいはずだ。あんな人形なんかに情などわかない。大切なのはアリシアとの再会と、失われた優しい時間の再開、この二つだけのはず。

「そう、他のことなんて……」

自分に言い聞かせるように一人言をぼやくと、プレシアは机に散らばる資料を取ろうとして、ポツンと置かれたノートを見た。

ただ静かにそこにあるだけのそれは、まるで物静かなフェイトを彷彿とさせるようで、プレシアは怒りのままにノートを掴むと床に叩きつけた。

「こ……の！」

腹立たしい。息を荒々しくさせたプレシアは、次の瞬間込み上げる何かを押さえられず、口に手を当てるとそのまま咳き込んだ。

「ッ……！」

床に膝をつき、手のひらを見つめる。付着した赤色、体が限界を訴えていた。

それでも、とプレシアは執念に目を眩ませ立ち上がろうとして――叩きつけて開いたノートの内容が目に入った。

始まりの一ページ。数冊のノートの、大事な大事な初めての日記の一文。そこにはたどたどしい文字で――

――アリシアって、誰なんだろ？

書かれた言葉。フェイトがプレシアに語らなかった悩みの鎖。

プレシアはただ惹かれるように、無意識にノートを手にとって、続きを読み始めた。

そこに書かれるのは、苦悩しながら、それでも努力を続ける、自分が人形と言い切った少女の『生』の記憶。

今、冷えきった親子の関係に、小さな波紋が揺らぐ。

第六話【テスタロッサ・2】

○月×日。
母さんはあれ以来笑ってくれなくなった。やっぱし私がアリシアって子じゃないからなのか。でも、記憶では私がアリシアだ。わからない。でも、がんばれば母さんはまた笑ってくれるはず。

○月△日
今日も母さんに怒られた。泣いちゃうとまた母さんは怒るから我慢。でも部屋に戻ったら泣いた。そんなとき、母さんとお兄さんを思い出すと安心する。あのときみたいに母さんはまた笑わないかな？

△月×日
リニスっていう新しい家族ができた。母さんは研究で忙しいから私に冷たいらしい。なら、いっぱい勉強して早く母さんのお手伝いができるようになろう。それで研究が終わったらお兄さんを探しに行く。いつもありがとうっていつか二人に言いたい。

「……」

無言のままにプレシアはフェイトが記した日記を読み進める。
初めは苦悩に満ちた内容だった。プレシアさえ知らなかったフェイトの悩み。それは記憶のダウンロードの失敗を意味していたが、プレシアはその事実すら考えずに、無心で日記に目を通す。様々な

日常の書かれた彼女の世界の断片。

母さんは喜ぶかな？
母さんが辛そうだ。
母さんのために頑張ろう。

その何れの文にも、必ず自分を思う言葉があった。人形と蔑む少女の、確かに感じる自分への慈愛の心。

「……ッ」

だからどうしたというのだ。プレシアは唇を噛み締め、自分を惑わせる忌々しい日記を投げ捨てようとするが、心とは裏腹に、日記を掴む指は、次のページを静かに捲る。

沢山の気持ちがあった。物静かな少女の、ありったけの気持ちが詰まっていた。自分の笑顔と、誰とも知らぬ男の記憶しか信じられないはずなのに、そこには溢れんばかりの心があった。

プレシアの心は乱れる。何故こんなにもフェイトは頑張れるのか。何故こんなにもフェイトを人形としか見てない自分を愛せるのか。

わからない。もう答えは遥か昔から出ているのにプレシアはわかりたくない。わかるには、フェイトを人形と突き放した時間はあまりにも長かった。

だがそれでも、複雑にプレシアの心に絡みつく鎖は、ページを捲る度に少しずつ解かれていく。

知らず、苛立ちに歪んでいたはずのプレシアの表情は、今にも泣きそうなそれに変わりつつあった。

彼女は事実、唯一の存在であるアリシアを蘇らせるために狂気に浸った。今もそうだ、全てはアリシアのため、アリシアを取り戻すために、最早治すことも難しい壊れるだけの体に鞭打ち、非道を進んできた。その道で沢山の過ちを積み重ね、その業は既に、アリシ

アを救うという目的がなければ、容易くプレシアを奈落に引きずりこむほどだ。
だがプレシアは昔からそうだったわけではない。アリシアを失う前は、ただの母親にすぎず――どうしようもなく普通の人だった。人を愛して、愛されるのを喜べる人間だったのだ。
アリシアのために積み上げた罪がプレシアを変えた。それしか見えない、そういう風にならざるをえなかった。
そんなプレシアの心が、フェイトの言葉によって昔のものに戻っていく。

「……フェイト」

それでも、プレシアは昔に戻るわけにはいかなかった。今更どうして戻れようか。戻ることがアリシアを見捨てることに繋がるならば尚更だ。

「たかが人形の癖に……！」

いつもなら容易く言えた言葉が、今はこんなにも心苦しい。それでもそう言わないと、プレシアは自分を保てそうになかった。
だがプレシアの指はページを開く。まるでアリシアのように自分のことを一番に考えるフェイトの日記を求めるように。
心が痛かった。全てを後悔したくなった。でも引き返せるような強さをプレシアは持ってなかった。母親としての強さがないなら、ただの人に戻って、これまでの罪を自覚できるほどプレシアは強くない。
葛藤、混乱。渦を巻く心中のまま、フェイトの日記はどんどん今へと向かっていく。過去に戻ろうとするプレシアとは真逆に、未来へ向けてフェイトの日記は進んでく。
そして、プレシアは遂にその一文を見つけた。それは、フェイト

がリニスに悩みを告げ、ある程度自分の偽りの記憶に折り合いをつけられるようになった日の、フェイトにとって大切な日の日記。
書かれていたのは他愛ないものだ。悩みを打ち明けられて、自分は自分のまま頑張ろうと書かれたそこには――

「あ……」

堪らず、プレシアは日記を取りこぼした。同時に、天井を見上げ、溢れそうな涙を堪えようとしたが、堪えられずに涙が流れる。

「そう……そうだったわね。アリシア」

プレシアは、いつかの記憶を思い出していた。アリシアとの優しい記憶、晴れた空、束の間の休日に、二人だけのピクニック。
あの日言われた言葉に、プレシアはどう答えていいかわからず赤面してしまった。そんなかつての日々の名残。

「フェイト……」

プレシアは日記を全て抱えると、半日ぶりに研究室から出た。
元からの体調不良と寝不足等で足下がふらつく。それでもプレシアは今すぐに行きたかった。何を言いたいのかもまとまらないけれど、今すぐにフェイトに会いに行きたかった。
これまでの葛藤も何もかも関係ない。脳の端っこにそれらは追いやり、プレシアは広い広い庭園を歩く。
あの子は何処にいるのだろう。まるでフェイトの行動がわからない自分に自嘲する余裕もない。水を求める旅人のようにプレシアはフェイトを探す。

「――べ終わったら、バルディッシュとまた……」

「じゃぁ私はキャッチャーやるよ！」

そしてプレシアの耳に、ようやく求めた声が届いた。プレシアは急いで声の元へと小走りに進み、あまりにも広い食堂の扉を開いた。

数人で使うにはあまりに大きなテーブルで、フェイトとアルフが向かい合って食事をしている。

見つけた。プレシアはこちらを見るフェイトの元へ歩く。

「あっ……母、さん？」

突然現れた母親に驚いたのか、フェイトを目を見開いて食事の手を止めた。

どうしたのかな？　今日は朝から研究室にこもっていて心配だったんだ。でもまだまだ魔法は勉強不足だから、お手伝い出来なくてごめんなさい。そういえば今日リニスからバルディッシュっていうデバイスを貰ったんだよ。あっ、母さんご飯まだだったね。今から母さんの分を――

ぐるぐると言葉が浮かんでは消えていく。何を言おうか悩んでいる内に、プレシアはどんどんフェイトとの距離を詰めていき――疲労にピークが来たのか、その場な膝をついた。

「母さん！」

慌ててフェイトはプレシアへと駆け出す。貧血もあるのか、顔は青ざめていて、側に寄ったはいいがどうすればいいかわからず、フェイトは混乱して、ふと、プレシアが抱えているものに見覚えがあるのに気付いた。

「あれ？　これ……私の？」

そうだ。間違いない。これは自分の日記だ。プレシアの体を、その小さな体で支えながら、どうしてプレシアが自分の日記を持ってるのか聞こうとして。
ふわりと、フェイトの頭はプレシアの胸に抱き抱えられた。

「えっ？　えっ？」

「フェイト……」

「は、はい！」

何がなんだかわからず、自分を呼ぶプレシアに上擦った返事をする。
その表情は伺えない。それよりも久しぶりの母の温もりにどうすればいいかわからずフェイトはもう混乱の境地にいた。
プレシアは胸にフェイトを抱くだけだ。葛藤の多さで言えば、彼女のそれも同じくらいだろう。言葉も出せず、『娘』をその手で包むしかできない不器用な自分。
でも言わないといけない言葉があった。言っても意味ないし、自己満足にしかならない。
だけど、伝える言葉が一つある。

「ごめんなさい……」

「母さん？」

「ごめんなさい……フェイト」

それ以上は今は言えない。静かに啜り泣くプレシアの気持ちを汲

み取って、フェイトは抱かれるに任せてもう何も言わなかった。
突然プレシアがこんな行動に出た理由はわからない。でもこの温もりは、フェイトの切望した温もりだ。
だから、これでいい。これで充分。
だけど一言、フェイトだって言いたい言葉が一つだけ。

「ありがとう母さん……」

何に対してのありがとうかはフェイトにだってわからない。
でもありがとう。
だからありがとう。
伝えたかったありがとう。
全部まとめてありがとう。

「フェイト……！」

プレシアの手に力がこもる。少し苦しいが、それだって優しくて。

「母さん……母、さん……」

フェイトもまた、自然に流れた涙は止まらなかった。
そんな不器用な親子を見守るのは、おろおろするアルフと物言わぬバルディッシュ。

「よかった。ようやく家族になれましたね」

そして、優しく見守る、忠実な使い魔が扉の向こうで、口の両端をにっこりと吊り上げるのだった。

○月◎日

リニスに全部を打ち明けた。何か変わったわけではないけど、何かを変えようって気持ちになった。私はフェイトで、アリシアではない。母さんが何度も笑顔なのはアリシアで、私は一回しか笑顔がない。でもいつか母さんが笑顔になるようにがんばろう。

そうなると、アリシアって誰なんだろう。記憶にしかない知らない私。でも、私の記憶は母さんとお兄さんからだから、それより昔のアリシアは、きっと私より年上なんだろう。

だったら、アリシアはお姉ちゃんなのかな？　そうならすっごい嬉しいな。

――私、妹が欲しい！

かつての約束は、未だプレシアの心に刻まれたまま――

第六・五話【空に誓う】

あの日を境に、プレシアとフェイトの関係は少しだけ変わった。どちらも距離感がわからないのか、おっかなびっくり挨拶している。そんな二人を冷やかすのがアルフとリニスの使い魔コンビの最近の趣味だ。

何よりも劇的に変わったのは、プレシアが研究を止めたことだ。そのことをフェイトが然り気無く聞いたとき、プレシアはやや遠くを見つめながら「もう、いいのよ」と儚げに呟いた。

ともあれ、ようやく手に入れた暖かい日常の中をフェイトは生きていた。

「行くよアルフー！」

「よぉーし！　バッチコイフェイト！」

仲良く外を駆けるフェイトとアルフ。少し離れたところには、木陰でくつろぐリニスとプレシア。

「母さーん！」

呼び掛けて手を振ればぎこちなく振り返す母の白い手。フェイトは満足そうに笑うと、晴れ渡る空を見上げた。

あの日から暫くして、フェイトは思いきって自分の記憶について

プレシアに聞いてみた。あの一瞬の記憶について、泣きそうなプレシアの笑顔と、悲しげに目を伏せる傷ついた少年の瞳。あの少年は誰なのか。プレシアはそれについて聞かれ、ただ痛みを押さえるように沈痛な面持ちで「あの人があなたを起こしたから、こうしていられるのよ」とだけ言った。

結局、兄と慕う少年について何もわからなかったけれど、やっぱし兄さんは自分にとって兄さんなんだという思いを強くした。

今はここにはいないし、何処にいるかもわからない。けれど、この青い青い空の下で繋がっているのは確かなはずだ。

いつかきっと、あの人にもいっぱいのありがとうを伝えよう。こんな綺麗な世界を掴めたのは、お兄さんが私を目覚めさせてくれたからなんだって。

誓いは空に、こんなにも透き通った空の誓いだ。絶対に忘れるわけがない。

優しい家族。

優しい居場所。

優しい世界。

フェイトは幸せだ。そして、この幸せがいつまでも続くのだと信じている。

それは本来はありえない結末だ。フェイトも、プレシアも、リニスも、アルフも、バルディッシュも、いや、この世界の誰もが『本来の結末』を知らないけれど。

しかし、結末は、筋書きは変えられた。何も出来ないと思っている少年の小さなきっかけにより、本来不運を辿るはずだった家族が救われた。そう、少年が手にした主人公補正の通りに、彼のきっかけが世界を変革させた。

それは誰もが喜ぶ結末に違いないだろう。リリカルなのはを知る者なら、誰もが一度は望んだ結末だろう。薄幸の少女を助かる世界を願っただろう。

結果は出た。こうして、少女は掴めなかった手を掴みとり、苦悩の全てがそこで終わった。
完全無欠のハッピーエンド。苦悩と苦痛の果てに産まれた、小さな小さな、しかし魔法のような奇跡の結晶。

「いつか会えるよね？」

望みを乗せた言葉が風とともに空へと運ばれる。フェイトは兄への思いを募らせて、今の幸福を、家族と共に幸福な笑顔で甘受するのだった。

――その感謝すべき兄こそが、テスタロッサ家の幸福を願っていない事実を、フェイトはまだ知らない。

―

時は遡りある日の病室。

「ところで」

「なんだ」

「君は彼を殺すつもりみたいだが、彼女のほうこそ本当の復讐相手じゃないのかい？」

「あぁ、アレなら別にいい……」

「どうしてか聞いても？」

「構わない。アレはどうせ醜く死ぬ。俺はその姿を笑いながら見てやるさ」

「まるで彼女がどうなるか知ってるみたいだね。そう、未来がわかってるかのようだ」

「……」

「まぁいいさ。その知識がどの程度当てになるかはわからないが、私の正体と作品を知ってる君だ。何か確信はあるのだろうが……本当にいいのかい？　もしかしたら死なない可能性だってある」

「そのときは」

「そのときは？」

少年の目が憤怒に輝く。男の好きな、人間らしい負の在り方。

「俺がこの手で――殺してやる」

「それはそれは、是非とも見てみたいものだな。きっとたまらなく素敵な舞台に違いない」

今は憎悪に歪むその眼。こんなはずじゃなかった世界に少年が絶望するまで、

残り、四年。

次回予告

幸福なる者と不幸なる者。
世界とは力の有無に問わず、この二つに切り分けられる。
破壊の後に宿った怒りと憎しみ。
破壊の後に宿った優しさと笑顔。
起源を同じくする二人もまた、切り分けられるは必然か。
静寂の海鳴る街に奇跡の石がばら蒔かれる時、切り分けられた二つが再び混ざりあい、静かな世界に絶望をぶちまける。

次回『開幕前夜』

いよいよキャスティング完了。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7046v/

オリ主の主人公補正って？

2011年10月12日16時49分発行